
兄妹

レンタン

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

兄妹

【Nコード】

N64110

【作者名】

レントン

【あらすじ】

とても仲のいい兄妹の物語。みなさんならこんなときどうしますか？ そしてどう決意しますか？ 二人の幸せのために。

注意：近親相姦系の話ではありません。14〜20話までが性的描写のシーンです。

かなり過激で露骨な内容にしたので、苦手な方は飛ばすことおすすめします。

1、思わぬ告白（前書き）

僕には仲のいい妹がいる。同じアパートの隣に住んでいるミキだ。お互いの家を行き来し、ご飯を一緒に食べることもある。そんな僕には2年近く前からつき合っている彼女のサキがいる。そろそろ妹に紹介したいと思っているところだ。

私には仲のいいお兄ちゃんがいる。お兄ちゃんとは同じアパートの隣同士だ。よく遊びに行ったり、遊びに来てくれたり、さみしいときは一緒に寝てくれたりする。でもそんな私にも実は彼氏がいる。すごく優しくて私のことを想ってくれている人だから、今度お兄ちゃんに紹介したい。

この物語は、とても仲のいい兄妹の話。二人とも2年近く前からつき合って恋人がいるが、お互いに教えてはいない。そろそろ結婚を考えていて、紹介しないといけないと思っている。でも結婚したら当然、離ればなれのところに住まないといけない。好き、大好きだからそうはなりたくない。そしたら……。

登場人物

中藤進矢 なかとしんや 26歳

ミキの兄。新日東工業株式会社の営業部に勤めている。2年近く前から同じ会社の経理部のサキとつき合っている。

中藤美希 なかくしのみき 24歳

シンヤの妹。西南プラスチック産業株式会社の会計課に勤めている。2年近く前から同じ会社の営業部のコウタ君とつき合っている。

1、思わぬ告白

1、思わぬ告白

季節は冬真つ只中のとても寒い朝、僕は布団にくるまってなかなか起きられないでいる。隣を見ると寝るときは一緒だったはずの妹がいない、おそらく先に起きて準備をしているのだろう。今日は月曜日、当然会社には遅刻しないように家をでないといけない。

(あゝ、さむっ！ 起きたくないなあー)

そんなことを思っていると……

「おにいちゃん、起きてー！」

台所のほうから声が聞こえてくる。しかしその声だけで起きるほど、僕はまだ決心がついていない。すると今度は足音が聞こえ、妹がすぐそばにやってきた。

「おにいちゃん、起きて！ もう朝ごはんできてるよ」

「えー、まだ眠いよ」

「ダメだよ。起きないと遅刻しちゃうよ」

「そうだけど……今、何時？」

「7時20分だよ」

会社には9時までには出勤しなければならず、通勤には1時間かかるので、もうこのまま起きないわけにはいかなかった。

「もうそんな時間か。仕方ない、起きるか」

そう言っ僕は布団から身体を起こす。

「おはよう、おにいちゃん。ちゅっ」

「な、何すんだよ！」

いきなりほっぺたにキスをされてしまった。

「おはよのちゅーだよ」

「いいよ、そんなの。兄妹なのに」

「いいじゃん。だっておにいちゃん、恋人とかいないから、してもらったことないでしょ？」

「いるよ。恋人ぐらい」

「えっ!？」

自然な流れの朝の会話で出たひと言、ところがよく考えてみると思わぬ告白だった。僕はまだ恋人がいることを妹に話したことがなかったのだ。

「あっ!？」

僕も自分で驚いて感嘆の声を出す。

「ねえ、今のホント？」

(まあ、いいか。いつかは話さないといけなかったんだし)

「ああ、ホントだよ」

「そんな。わたしの大好きなおにちゃんなのに……」

妹は首を傾げて、少し残念そうな表情をしている。

「何言ってるんだよ。さっきの口ぶりからして、実はいるんじゃないのか？ ミキにも」

「……そ、それは……」

切り返しを予想していなかったのだろう、瞬きをしながら上目づかいで僕を見ている。

「どうなんだ？」

「……いるよ。わたしだって」

「やっぱりそうか。じゃあ、もう……」

(いや、今はやめておこう。これを言うとショックが大き過ぎるしな)

「ん、どうしたの？」

「いや、そろそろ起きて準備しようかになって」

「わかった。朝ごはんできてくるから、着替えたらすぐ来てね」

「うん」

僕は頷くと布団から出て立ち上がり、洗面所で寝癖を直し、着替えを済ませた。

これはとても仲のいい兄妹の物語。朝の何気ない会話から出た、突

然の告白。それはこれからの二人を変えるほど大きなものだった。

2、つないだ手

2、つないだ手

兄を起こしているとき、突然告げられた驚愕の事実。それは互いに恋人がいたにもかかわらず、隠していたということ。

しかしそれでもわたしにとって、兄は特別な存在だった。2年前、大学を卒業して兄が住んでいる地域と同じところに勤めることが決まったとき、予めアパートの隣の部屋をとって迎えてくれた。普通に考えれば禁断の愛、それを思わせるほどの配慮だ。ただ、これには訳があった。実は、わたしたちはその年の3月に両親を交通事故で亡くしていた。つまり、隣同士に住もうというのは、悲しみに暮れるわたしに差し延べてくれた純粋な救いの手という訳だった。

嬉しかった。本当に嬉しかった。以前よりも兄が好きになって、一時は結婚したい、そう思うことさえあった。でも会社に行き始めて、意外にもわたしにはすぐに恋人ができた。

その上で、今日知った事実。心の奥底ではわかっていた。いつかは互いに結婚して、離ればなれに暮らすことになるということ。そう思うとさみしさが急にこみ上げ、目から涙が零れ落ちる。フライパンでは出来立てを出すために焼いていた目玉焼きがジューツと音をたてている。

「あれ？ ミキ、泣いてるの？」

「えっ！？ ふああゝあ。うんうん、ちょっとあくびが出ただけ」

「そうか」

気づかないうちに自分の部屋で着替えを済ませていた兄、見られた涙を、とっさにあくびと言ってごまかした。

1分ほど経って、目玉焼きが焼き上がり、ご飯とみそ汁をよそって朝ごはんがテーブルの上に並ぶ。わたしはエプロンを外して向かい合って席に着いた。

「もう着替えてたんだね」

「うん。それじゃあ、いただきますーす」

「いただきますーす」

いつもと同じ朝ごはん。パツと見は何一つ変わらない、ところが心は気になることだらけ。でも何から聞いたらいいのかわからない。そうやって迷っているうちに朝ごはんはお皿から、お茶碗から、消えていく。結局何も話せないまま、食べ終わってしまった。食器を台所の洗面器につけて、上着を着てカバンを持ち、くつを履き替えて、外に出ると駅までの道を並んで歩き始める。

わたしも全く話さないが、兄も何一つ話してくれない。わたしが口を開くのを待っていていてくれるのか。いや、それとも知らないふりをしているのだろうか。

しばらくして太陽が少し雲に隠れ、冷たい冬の風が二人の間を吹き抜ける。

「はあー、寒いなー」

冷える手を口の前に持ってきて、あつたかい息を吹きかける。そんなわたしを見て兄が……、

「手、つなぐか」

そつと手を差し出してくれた。

「えっ!?!」

「ほら」

一瞬驚いたが、その手をぎゅっと握りしめた。

「ありがとう、おにいちゃん」

「うん」

久しぶりにつないだ兄の手、それはとてもあたたかく、心地よかった。

3、ホントの気持ち

3、ホントの気持ち

12時過ぎ、僕は午前中の仕事を終えて、食堂でランチを食べている。まだ左手が朝、握りしめた妹の手の感触を覚えている。そのせいか、ボーっとして彼女のサキを誘うのを忘れ、今日は一人だった。

(冷たかったなー、ミキの手)

もうすぐ妹の手を僕が温めることができなくなるかもしれない。実は朝起きるときにしてくれた、ほっぺたへのキスも嬉しかった。元々そこまで妹を愛していたわけでない。今思うと、最初は悲しみを和らげる、そのつもりで優しくしていただけのはずだった。でもいつの間にか「好き」が「愛する」に変わり、触れる感触を恋しく感じるようになっていた。しかし僕にはサキという大事な恋人がいる。近いうちに結婚したい、そう考えていたが、妹の存在が足かせになり、一步を踏み出せないでいた。

(ミキにも恋人がいたのか……。じゃあ、僕は……)

「シンヤ君、どうしてメールしてくれなかったの？」

そんなことを考えていると、ランチを持ってサキが現れた。

「ごめん。つい、うっかり忘れて……」

「そう。なんか、元気ないね。何かあったの？」

「うん、まあ」

「ねえ、よかつたら私に話してくれない？」

「……そうだな。近いうちに話すよ」

「近いうちに？ どうして？ 今はダメなの？」

「いや、ダメじゃないんだけど……。……決心がつかないんだ」

「分かった。じゃあ、待ってるね」

「ありがとう」

二人は向かい合って座り、一緒にご飯を食べる。いつもなら楽しい

会話が弾むひとときなのだが、今日はあまり話す気にはなれなかった。それでも彼女は笑顔を僕に見せてくれている。

サキはとても優しい女性だ。僕の2つ年下で、出会いは今から2年近く前、4月の終わりごろのことだった。会社帰り、公園に寄った僕は一人でベンチに座り、缶コーヒーを飲んでいた。そこに彼女が来て……、

「好きです。もしよければ私とつき合ってください」

これが二人のスタートである。同じ会社の社員、何度か彼女のことを見かけたことはあったが、話したことは全くなく、ましてや告白されるなんて思ってもみなかった。でもきれいでとてもかわいい笑顔、一瞬で僕は心を奪われ、つき合い始めることにした。

あれから2年近く、育んできた愛は間違はなく本物、結婚はその延長線上として、僕の頭の中に、そして彼女も意識しているに違いなかった。

（結婚か……。いずれは話さないといけないんだ。妹の気持ちも聞いてみるか……）

ずっと考えごとをして、気づかないうちにランチを二人とも食べ終わってしまった。

「ごちそうさま」

「ごちそうさま。じゃあ、行こうか」

「うん」

二人は立ち上がり、エレベーターの前まで歩いていく。

「午後の仕事、頑張ってるね」

「ありがとう、頑張るよ」

「あつ、それでさ、今日は一緒に帰れそう？」

「うーん、無理かな。でも明日は大丈夫だと思うよ」

「やったー！ じゃあ、いつもの公園で待ってるね」

「分かった」

ここでエレベーターの前に着いた二人は、数人の人と一緒に自分の
オフィスまで昇っていった。

4、兄の手と彼の手

4、兄の手と彼の手

仕事が終わって夜7時前、わたしは公園のブランコに座って彼を待っている。冬の夜、街灯の灯りが一つしかない公園は寒く心細かった。

「おにいちゃん……」

手のひらを見つめて呟いたのは、兄のことだった。右手はまだ、朝握りしめた兄の手の感触をはつきりと覚えている。

しばらくして公園の時計の針が7時を指したとき、彼が現れた。

「ごめん、遅くなって」

「うんうん」

わたしは立ち上って彼を見つめ、首を振る。

「行こうか」

「うん」

手をつなぐと、二人は公園を出て、ゆっくりと駅までの道を歩き始める。何も話さない、でもその中でわたしはある日のことを思い出した。

彼との出会いは入社してすぐ、4月の終わり頃だった。6時過ぎわたしは会社を出て、すぐに足を止める。見上げた空は暗く、どしゃぶりの雨が降り注いでいた。

（雨が。今日、傘持っていない。どうしよう……）

入社してすぐ、まだ友達もできていなかったわたしは、しばらく誰にも話しかけられず、20分ほどそのまま立ち尽くしていた。駅までは歩いて10分、走っても間違いなくずぶぬれになってしまう。

それともう一つ、履いているのはハイヒール、このまま一歩踏み出して無理に走れば、水たまりに足をとられて転ぶ、それは火を見る

よりも明らかだ。

(でも……、あまり遅くなるといけないし……、行こう！)
そう思っただけで、一歩を踏み出そうとしたとき……、

「待って！」

「えっ!？」

手をつかみ、声をかけてくれたのが彼だった。

「僕の傘でよければ、駅まで一緒にどうぞです？」

「あっ、ありがとうございます」

わたしはすぐに頭を下げてお礼を言うと、二人は駅までの道を歩き始めた。握られていた手、感触はなぜか兄とよく似ていた。

告白されたのは駅について、コンビニで傘を買ってくれたすぐあとのこと。

「はい、これ」

「ありがとうございます」

「あの、もしよかったら、僕とつき合ってくれませんか」

「えっ!」

一瞬驚いたわたし、でもすごく嬉しかった。なぜだか兄に告白されたような気がして……。

「はい、喜んで」

それがわたしの答えだった。

そして今、あのときと何も手の感触は変わらない。つき合い始めて2年近く、そろそろ結婚をわたしも意識するようになっていた。

「じゃあ、僕はここで」

「おつかれさま」

「おつかれー」

先に電車の来た彼、手を振り見送る。でも兄の存在、それは結婚をためらわせるほどに大きい。

(はあっ……、おにいちゃんも恋人がいたんだ……。じゃあ、わたしは……)

自分の存在と迷い。まだ確認しなければいけないことがたくさんあるのがわかった。

5、忘れていたこと

5、忘れていたこと

火曜日の帰り、6時半に仕事を終えた僕はサキとの待ち合わせ場所、会社近くの公園に向かって歩いていった。

「はあっ」

……

その途中、何度かため息が漏れる。結局、昨日から今日にかけて、妹とはほとんど話せなかった。どうしてか分からない。聞かないといけないこと、いや、聞きたいことがいっぱいあるのに何から話したらいいのか分からなかった。どれも妹の気持ちを傷つける気がして……。

「おつかれさまー」

公園に着いたとき、そんな僕を彼女は笑顔で迎えてくれた。

「おつかれさま。待った？」

「うんうん。行こう」

「うん」

二人は手をつないで駅までの道を歩き始める。当然、彼女にも聞きたいことがたくさんある。でも、何から話すべきなのか分からない。結局、先に口を開いたのは彼女だった。

「どうしたの？」

「えっ!？」

「昨日からずっと変だね。何かあったの？」

「いや、その……」

「ん？」

実を言うと、僕に妹がいることだけは彼女に話したことがある。ただ、隣同士に住んでいること、「愛する」気持ちがあること、そこまでは話したことがなかった。

「僕に妹がいるのは知ってるよね」

「うん」

「昨日知ったんだけど、妹にも恋人がいたんだ」

「……それだけ？」

「……うん」

「よかったね」

「えっ!？」

なぜか僕は彼女の反応に驚いてしまった。

「どうして驚くの？」

「それは……」

「嬉しくないの？」

「嬉しい? ……あっ」

そんなこと、考えもしなかった。その通りだ。僕は先のことばかり考えすぎて、祝福の言葉を贈ることをすっかり忘れていた。

「そうだよな。僕、「おめでとう」の言葉を贈るのを忘れてたよ」

「ふふっ、突然のことでショックだったんでしょ」

「うん」

「今日、言ってあげてね」

「分かった。ありがとう」

「くすっ、どういたしまして」

帰り道、彼女に気づかされた大事なこと、僕は何から始めればいいのか分かった気がした。

6、祝福

6、祝福

火曜日の8時前、わたしは晩御飯のカレーを作り終え、兄の帰りを待っていた。先ほどの来たメールによると8時には帰れるそうだが、メニューもすでに伝え、一緒に食べることも了承してくれた。今日は1日、彼にずっと会えなかった。どうやら忙しかったようだ。一緒に帰ろうメールも残業があるということと断られてしまった。さらに昨日から兄ともほとんど話してなく、気持ちは若干不安になりつつあった。

「ただいまー！」

そんなとき兄が帰ってきた。待ちわびていたわたしは、急いで玄関に走っていく。

「おかえりなさい」

「おっ、カレーのいい匂いがするね」

「でしょ。すぐ用意するね」

すでに自分の部屋で着替えを済ませていた兄、わたしとおそろいで買った薄い青の部屋着をきている。ちなみにわたしのは薄い赤だ。キッチンに戻ったわたしは食器棚からお皿を二つ出し、ご飯とカレーをよそう。兄はその横で冷蔵庫から麦茶とコップを取り出し、テーブルに置く。

すぐに二人の前にはカレーライスが並び、向かい合って座る。

「いただきます」

「いただきます」

まずは兄が先に一口食べるのを見つめる。

「どう？」

「おいしいよ」

「よかったー」

満面の笑顔を、それがわたしの不安を全て吹き飛ばしてくれたような気がした。

「あっ、そういえば昨日言い忘れていたことがあったんだ」

「なに？」

「おめでとう」

「えっ！？ 何のこと？」

「分からない？ 恋人がいたことだよ、ミキに」

「あっ！」

「そうだ、わたしもすっかり忘れていた、祝福の言葉を贈ることを。本当は嬉しい出来事のはずなのに、先のことばかりが気になって、自分の気持ちしか考えられていなかった。」

「いやー、今日言われたんだよ、彼女に。「よかったね」ってさ。」

そのとき初めて気がついたよ、「おめでとう」を言うの、忘れてたなって」

「ごめん、わたしも忘れてた」

「いいよ、お互い様だから。じゃあ、ミキも」

「うん。ありがとう。おにいちゃん、おめでとう」

「ありがとう」

実はお互いにいた恋人の存在、初めてそのことを知ったとき、わたしはただ、シヨックだった。すぐに兄が離れていってしまうと思ったから。でもそれはまだ今意識することじゃない。大切なのは相手を祝福してあげること。それが二人にとって始まりのきっかけになった。

7、意識と現実

7、意識と現実

祝福の言葉、「ありがとう」。それは二人の表情を笑顔に変え、心の落胆を希望へと変化させた。するとさっきまで感じていた不安な気持ちは消え、聞きたいことが出てきた。

「なあ、ミキ」

「なに？ おにいちゃん」

「いろいろ聞いてもいいかな？」

「いいよ」

「つき合い始めたのはいつ？」

「おとしの4月の終わり頃からだよ」

「えっ！ そんなに前から」

「うん」

「そうか。じゃあ、僕と一緒にか」

「一緒に？」

「うん。実は僕も同じ時期につき合い始めたんだ、彼女と」

「へえー、おにいちゃんが告白したの？」

「いや、告白されたよ。ミキは？」

「わたしも同じ。告白されたんだ」

「どんな人なの？」

「すごく優しい人、おにいちゃんみたいに」

「ははっ、なんか恥ずかしいな、そう言われると」

「ふふっ、おにいちゃんの恋人はどんなひと？」

「明るくて優しい、きれいな人かな」

「きれいな人か。会ってみたいな。名前は？」

「サキだよ。ミキの彼の名前は？」

「コウタっていうんだ」

「歳は？」

「おにいちゃんと一緒、26歳だよ。サキさんは？」

「ミキと一緒にだよ。24歳だ」

「似てるね、わたしたち」

「そうだな」

「兄妹だからかな？」

「そうかもしれないな」

会話は弾んだ。恋人がいる、そのことそのものはお互いにショックなことだったが、本来は嬉しいこと。そしてそれぞれ二人には相手と過ごしてきた楽しい思い出があった。ただそれは同時に、二人を引き離す現実も示していた。

それに先に触れたのは妹だった。

「ねえ、おにいちゃん。結婚って考えてる？」

「えっ!？」

思いもよらない質問、僕は驚き、一瞬どう答えていいのか分からなくなってしまう。

「ねえ？」

強く念を押す妹の声。息が詰まるような気がして、胸が締め付けられるような気がして、苦しかった。おそらく妹も同じ気持ち。ここでウソをつく、そういう選択肢もなかったわけでもないが、僕はあえてホントのことを言った。

「ああ、考えてるよ」

「そっかー」

「ミキは……意識してるのか？」

「……………うん」

二人は苦しみながらも正直だった。今日の二人の会話はここで終わり。「今はやめよう」、「これ以上はやめよう」、そんな一言は必要なかった。

8、彼の提案

8、彼の提案

水曜日の朝、久しぶりにわたしは一人だった。兄はどうやらわたしをおいて先にいってしまったようだ。

「ふああ〜あつ」

大きなあくびを一つ、目からは涙が零れ落ちる。寝るときも一人だったわたし。「一緒に寝ようか」、そう言ってくれた兄を、「今日はいい」、珍しく強い口調で断つてのことだ。ただそれは一時の強がり、結局ほとんど眠れなかったのは言うまでもない。

会社でも全く仕事に集中できない。不安なのだ、兄のことがどうしようもなく気になって。

「ねえ、ミキ」

「なに？」

「一緒にランチ食べに行こう」

「……今日はいいや」

「そう。じゃあね」

友達のランチの誘い、なんだか気分がのらず、断ってしまった。そのためわたしはあまり行くことのない食堂に向かった。

頼んだメニューは日替わりランチ、おぼんを持って席を探している
と……、

「おーい、ミキ」

コウタ君が声をかけてくれた。窓際の丸いテーブル、向かい合うように席に着いた。

「いただきます。ふああーあつ」

「どうした？ 眠そうだな」

「うん。昨日の夜眠れなくて」

「何かあったのか？」

「わたしにおにいちゃんがいるのは知ってるよね」

「うん」

「そのことでさ、月曜にお互いに恋人がいたことを知って」

「よかったね」

「よくない！ だっておにいちゃん、結婚しちゃうんだよ！」

彼の前、わたしは大きな声で子どもみたいなことを口走ってしまった。

「あっ！」

急に周りを意識して恥ずかしくなる。

「はははっ、誰も聞いてないよ」

「笑わないでよ」

「ごめん、ごめん。でも妹と一緒にだな」

「えっ」

「先週僕も結婚のことを話したんだ。そしたら妹がすねちゃって」

「そうなんだ。……ちよつと待って」

「なに？」

「結婚つて、わたしと!？」

「そうだよ。他に誰がいるんだよ」

「嬉しい。でも……」

「兄のことも好きなんだろ」

「うん、大好き」

「そうか。近くに住んでるの？」

「うん、隣同士だよ」

「じゃあ、今日は一緒に布団で寝たら？」

「……いいの？」

「うん。先週、僕も妹とそうやって寝たから」

「わかった。やってみる」

今までわたしはたくさん兄と一緒に寝てもらった。ただそれはいつも別々の布団だった。でも今日は一緒に布団、わたしには身体をと

おして伝えたいことがいっぱいある気がした。

9、つながりの違い

9、つながりの違い

水曜日の昼、午後3時過ぎ、仕事が一段落した僕は、サキにメルをして屋上に一休みに来ていた。ここは普段は喫煙所なのだが、この時間帯だけはあまり喫煙者がいない。ビルの高さは10階建て市内にはもっと高いビルもあるが、すぐ近くにはなく、ここからの景色は開けていて、意外ときれいだった。

「おつかれさま」

「サキ、おつかれー」

手すりにもたれかかって待っていると、ドアが開いて彼女が姿を現す。二人は手すりに腕をおき、前を向いて話し始める。

「どうしたの？ 勤務時間中にメールしてきた」

「ごめん。忙しかった？」

「うんうん。私もちょうど休憩してたから」

「そうか。おやつの時間？」

「そんなところかな」

「実はさ……昨日妹と話したんだ、恋人のこと」

「そう。ちゃんと、「おめでとう」って言ってあげた」

「うん。でもさ、しばらくは楽しく話ができただけど……」

「……何かあったの？」

「途中でお互いに結婚の話になって……」

「えっ！？ 結婚!？」

「……あっ!」

今気がついた。僕はまだ彼女に結婚についてほとんど話をしたことがなかったのだ。

「まだ、言ったことなかったけ？」

「うん。でも考えてくれてたんだ」

「そりゃ……もうすぐ2年くらいになるから」

「嬉しい」

僕の突然の不用意な発言ではあったが、彼女は素直に喜んでくれていたようだ。

「ありがとう。それで妹もつき合い始めて2年くらいで、結婚を意識しているらしくて……」

「ホントに仲がいいんだね」

「ん？」

「分かるよ。私も、兄がそうだったから」

前に一度、彼女に兄がいることは聞いたことがあった。ただ、その先のことはよく知らない。

「じゃあ、もう結婚してるの？」

「うんうん。まだ、先週話したばかりで。今週末にプロポーズするってさ」

「そうなんだ」

「ねえ、シンヤ君」

「なに？」

「兄妹と恋人同士のつながりの違い、分かる？」

「つながりの違い？」

「兄がね、話してくれたんだ、先週。例えば、つながりが強いのはどっちだと思う？」

「……分からないけど」

「兄妹のほうが強いんだって」

「理由は？」

「生まれた時からずっとつながっていて、一生離れることはないから」

「血のつながりのことか」

「そう。でも恋人同士は違う。どんなに想いが強くてもそれはあとからつながったもの、いつ離れてしまいか分からない。だから結婚してホントのつながりにするんだって」

「そうか。結婚したら家族になるもんな」

「うん。私も最初はすごくショックで悲しかった、兄から結婚の話を聞いたとき」

「仲がいいんだね、僕らと同じように」

「でもさっきの話を聞いたときに分かったの、結婚することの大切さが。だから……」

「だから？」

「妹さんにしてあげて、私にプロポーズする前に、さっきの話を」
「分かった」

若干不自然な感じもした、プロポーズの話を事前に告げるなんて。でもそれはそれぞれの兄妹にとって、結婚の意味、つながりの意味を知るために必要なことだった。

10、同じもの

10、同じもの

一緒に布団で寝る、そう決め込んで帰って来たものの、昨日のこともあつて夕食は一人で食べた。今は風呂に入ったあとでパジャマに着替え、テレビを見ている。

さみしさはあつた。いつもならたとえ一緒に寝ない日でも、直前までは隣にいてくれた。でも今日はそばにいない。会いに行きたい気持ちはある、おそらく兄も今隣の部屋でテレビを見ている。ただ自分から会いに行く気にはなれなかった。

11時を過ぎて、もうすぐ寝る時間だ。わたしはテレビを消して立ち上がる。そのとき玄関から、

“ピンポン”とインターホンのなる音が聞こえてきた。

(おにい……ちゃん?)

「おーい！ ミキ！ 入っていいか？」

(やったー！)

途端に嬉しさが込み上げてきて、走って玄関に向かった。

「いいよ。入って」

そう言うとドアが開き……、

「こんばんは、ミキ」

パジャマ姿の兄が入ってきた。

「おにいちゃん……」

「一緒に寝るか？」

「うん！」

わたしは手をつないで寝室に案内する。二人で布団を敷き始める。どちらの部屋でも一緒に寝られるように、2つずつ一式を用意している。

「あつ、待って！」

「どうした？」

「今日は一緒の布団で寝たいの」

「えっ……、そうか。分かった」

でも今日は兄が自分の布団をおろそうとしたところを止めた。一瞬驚いたような顔をしたが、すぐにお願いを聞いてくれた。

まくらだけは2つ、毛布と掛布団は半分はまだ折つてある。二人は間のスペースに座り向かい合った。いつもより近い距離、それだけで心臓の鼓動が早くなってドキドキする。

「ミキ、今日は話しておきたいことがあるんだ」

「なに？」

「僕、今度サキにプロポーズをしようと思ってる」

「えっ……」

先に口を開いたのは兄、それは衝撃的な一言からだった。分かっていた、覚悟していた、昨日から、いや、もっと前から。それでも急に悲しくなって目からは涙が零れ落ちた。

「ミキ、泣かないでくれ。僕だって同じ気持ちだから」

「そうなの？」

「ああ。だってミキだって結婚するんだろ」

「……そうだよ」

すると今度は兄が目に入れていた涙をあふれさせる。同じ布団の上、おそろいのパジャマ、同じ決意、そして同じ気持ちだとわかった。

11、柔らかさの訳

11、柔らかさの訳

頬をつたう二粒の涙、結婚したら離ればなれになる悲しさ、今二人が感じている気持ちだった。ただそれは同時に互いの恋人にも言えることだ。サキに言われたつながりの違い、だからこそ結婚して本当のつながりにしなければならぬ。

しばらく見つめ合っていた二人、今度は妹が先に口を開いた。

「ねえ、おにいちゃん」

「なに？」

「どうして結婚するの？」

感じ取ったのかもしれない、僕の言おうとしていることを自然に。

「ホントのつながりにするためだよ」

「つながり？」

「そう。僕らは兄妹だから生まれた時からつながっている。それは絶対に切ることはできない」

「うん」

「でも恋人同士は違う。どんなに想いが強くても、それはあとからつながったもの、いつ離れてしまつか分からない。だから結婚してホントのつながりにするんだ」

「どういうこと？」

「つまり家族になるってことだよ」

「家族に……なるんだ」

「今日言われたんだ、サキに。この話をしてあげてって」

「わたしに？」

「そう。ちゃんと考えてくれてるんだよ、ミキのことも」

「そうだったんだ」

話の意図が分かり、妹は安心し少し納得した様子に見える。ここで僕は始めから疑問に思っていたことを聞いてみた。

「なあ、ミキ」

「なに？」

「どうして今日、一緒の布団で寝ようなんて言ったんだい？」

「それは……コウタ君に言われて」

「そうだったのか」

「うん。……なんかドキドキするね」

「そうだな」

「寝ようか」

「うん」

二人はたたんであった布団に手をかけ、向き合ったまま身体を倒して横になった。

「ねえ、おにいちゃん」

「なに？」

「手貸して」

僕は言われたとおり右手を預ける。すると妹が思わぬ行動に出た。なんとその手を胸のふくらみに当てたのだ。驚いて一瞬手をはらいそうになる。

「待って！」

ところがそれをすぐに妹が引き止めた。

「えっ!？」

「離さないで」

「分かった」

とりあえず言われたとおりにしてみる。

「おにいちゃん、どうして女の子の身体って柔らかいか知ってる？」

「……分からないけど」

「相手を落ち着かせるためだよ。深呼吸してみて」

「すっー、はあーっ」

大きく息を吸って吐いてみる。

「落ち着いた？」

「少し……」

恥ずかしかった。心臓の鼓動がさらに早くなって、熱いものが集中してきた気がした。でも相手は妹、深呼吸ですぐに落ち着きを取り戻した。

「おやすみなさい」

そう告げると妹はすっと目を閉じた、手は胸に当てたままで。僕はそっと胸から手を離し、身体を近づけると優しく抱きしめた。

「ありがとう」

「おやすみなさい」

抱きしめ合うと互いの身体に温かさを感じつつ、そのまま深い眠りについた。

12、罪悪感が芽生えて……

12、罪悪感が芽生えて……

今日わたしが目覚めたとき、身体は兄の手の中だった。優しく温かな感触はわたしを心地よい眠りへと誘い、いつもよりぐっすり眠ることができた。ただそれと同時に、心の中には一抹の罪悪感が芽生えている。

公園の時計の針はもうすぐ午後7時、これからコウタ君と待ち合わせているわたしは罪悪感を消したいと考えていた。

「おつかれさま」

「ごめん、遅くなって。おつかれさま」

7時を過ぎてすぐ、彼が現れた。手をつなぎ公園を出ると、二人は駅までの道を歩いていく。

「結局昨日の夜はどうしたの？」

「おにいちゃんと一緒に寝たよ」

「どうだった？ 兄と一緒に寝て」

「よかったかな。でも……」

「ん？ 何かあったのか？」

「いや、何もなかったけど……」

兄と一緒に寝た、その行為自体では問題は起こらなかった。でも心に芽生えた罪悪感、ただそれを自分から口に出すのは気が進まなかった。

「ホントに？」

「……うん」

「僕はあつただけだな」

「えっ！」

「言っただろ、先週妹と一緒に寝たって」

「うん」

「よかつただけけど、ちょっと今罪悪感があるんだ、心の中にね」

彼も同じ気持ちだった。ホツとしてわたしも自分も胸の内を明かすことにした。

「そうだったんだ。実はね、わたしも今同じ気持ちなの」

「やっぱりそうか。じゃあ、どうする？」

「どうするって言われても……」

彼が何を求めているか、どうすればこの罪悪感を解消できるか、答えはすでに分かっている。それでもさすがに自分のほうから口にするのは恥ずかしい。

「言えない？」

「う、うん」

言ってくれると思っていた。ただこのとき彼は少しいじわるをしてきた。

「それじゃあ、帰ろうか、今日は」

「えっ！ そ、それは……」

「いや？」

「……うん」

「なら言って、どうしたいか？」

「……」

足を止めて立ち止まり、彼はわたしの目を見つめている。まだ恥ずかしさはあった、でも優しい表情がわたしにこの言葉を口にさせた。

「一緒に寝たい」

「誰と？」

「コウタ君と」

その瞬間、ほほが熱くなり、心臓の鼓動が早くなって、顔から火が出るほどに恥ずかしかった。

「ありがとう、言ってくれて。行こうか？」

「どこに行くの？」

「決まってるだろ、ホテルだよ、ホテル」

「そっかー、そうだよね」

思わず聞いてしまった、当たり前のことなのに。このあとわたしは

ホテルに着くまで何も口にしなかった。察して彼も何も話さない。一緒に寝るのはとても久しぶり。昨日の兄のときと違ってただ寝るだけじゃない、抱きしめられて全身で好きな気持ち伝えあう。今日は今までで一番愛を感じられる気がした。

13、彼女の予感

13、彼女の予感

木曜日の夜、僕はいつもの公園でサキを待っている。今日は、彼女は残業なのだろうか、時計の針はすでに7時を回っている。

(あー、さむっ、遅いなー)

冷たい風が吹き抜ける中、身体を震えさせしばらく待っていると、“ピピピッ”、と携帯の着信音が鳴る。

(おっ、サキかな)

そう思っただけを受けを見ると、メールは妹からだった。

(ミキからか。えっと……、今日は彼とホテルで泊まるね、おやすみなさい。と)

どうやら妹はホテルで彼と一緒に夜を過ごすことにしたようだ。

(なるほどね。僕と一緒に布団で寝てちょっと罪悪感でもあったのかもな。じゃあ、僕も誘ってみるか)

「ごめん、ホント遅くなって」

「おつかれさま。残業でもあったの？」

「うん、そんなとこ。メールできなくてごめんね、充電が切れちゃったから」

「いいよ。こっやってちゃんと会えたから」

「ありがとう。じゃあ、行こう」

「うん」

結局彼女が現れたときにはすでに7時半を過ぎていた。二人は手をつなぎ公園を出ると、駅までの道を歩き始める。

「昨日は話してあげた？ つながりの違いのこと」

「ああ、話したよ」

「どうだった？」

「分かってくれたと思うよ」

「ならよかった」

今日は一緒に夜を過ごしたい。こういう話はあまり先延ばしにする
とよくない、僕は思い切ってここで切り出してみた。

「なあ、サキ」

「なに？」

「昨日さ、妹と一緒に布団で寝たんだ」

「えっ！ それホント!？」

「うん。それでさっき妹からメールが来て、今日は彼とホテルに泊
まるってさ。だからサキもどうかな？ 疲れてるかもしれないけど」

「そうだったんだ……」

「ん？ どうしたの？」

「あっ、いや、ごめん。なんでもないよ」

「じゃあ、さっきのこと……」

「いいよ、泊まるう、一緒に」

「やったー!」

彼女は一瞬動揺した様子を見せたが、笑顔でオツケーしてくれた。
でも少し気になった……、

（「そうだったんだ」ってどういう意味だろう……。まあ、今はい
いか）

「嬉しい？」

「うん、そりゃね。久しぶりだから」

「シンヤ君のエッチ!」

「いいじゃん。サキはいや？」

「うんうん。楽しみだよ」

「よかった」

妹と隣同士に住んでいるせいか、僕はほとんど彼女と一緒に夜を過
ごしていない。今日はおそらく1年ぶりぐらいだろうか。しかも妹
も彼と一緒に過ごすことが分かっている。後ろめたさのない今日は、
いつもより愛を感じ合えそうに思えた。

14、愛のあかし（前書き）

今日から20話まで性的描写のシーンになります。

苦手な方は飛ばすことをおすすめします。

またかなり過激で露骨な内容になっています。

予めその点に注意していただきますようよろしくお願いいたします。

14、愛のあかし

14、愛のあかし

考えてみれば久しぶりだ、彼の前で裸になるのは。ホテルに着いて、先にシャワーをすませたわたしは、彼があがってくるのを待っている。着ているのは備え付けのガウンではなくパジャマ、家から持ってきたものだ。ボタンの付いた服、それを少しずつ脱がせ、肌を露わにするのが彼の趣味だった。

5分ほど経って、少し濡れたままの髪で彼が姿を現す。服は先ほどまでと同じ、スーツ姿だ。

ベッドから立ち上がるわたし、二人は向か合つとそつと唇を合わせた。

「はあっ、ちゅぱ……ちゅう……ふうっ、ひいっ……ふうっ、ちゅう……ジュルル……ゴクンッ、はあっ……」

激しく舌を絡ませ、幾度となく彼から唾液が送り込まれる。それは3分以上にもおよぶ長いキス、快感に酔いしれ、終わったときにはすでに頭がくらくらしている。

「ミキ、きれいだよ。脱がせていい？」

「うん」

彼はわたしが頷いたのを確認すると、パジャマの上のボタンをひとつずつ外していく。すると薄いピンクのブラジャーが間からのぞいた。

「かわいいのしてるね。見せて」

そのまま脱がされるとベッドに座らされ、両手で胸を優しくもまれる。

「はあっ……ふうん……」

嬉しかった、彼の久しぶりの手の感触が。感動のあまりうるんだ目から涙が零れ落ちる。

「どうしたの？ ミキ」

「……ひつくつ、嬉しくて……嬉しくて……」

「そうか、ありがとう」

そこで彼は一旦動きを止め、わたしを包み込むように抱きしめてくれた。心臓の鼓動を胸に感じ、彼の大きさを感じられた。

しばらくしてわたしは、体重をかけられるとベッドに押し倒された。今度はブラジャーのホックを外され、直接もまれる。

「起ってるね、ミキのここ」

「はあっ、いや……。ひゃあっつ！ ひつくつ」

敏感なところつままされると、声が漏れ身体が跳ね上がる。

「気持ちいい？」

「うん」

「じゃあ、もつとしてあげるね」

今日の彼はいつもより積極的だった。両手は胸から離れ、軽くキスをすると、ズボンに手をかけて脱がされる。恥ずかしさはまだ少しある、でもここはぐつとこらえて抵抗しない。

「かわいいな。あっ、湿ってるよ、ミキのここ」

それこそがわたしの愛のあかしだ。

「僕も脱ぐね」

そう告げると服を脱いで、パンツ一枚になった。そこはすでに大きく盛り上がり、先っぽは少し濡れている。

人差し指を一本、中心を上から下になぞられる。

「ひいいっ……はあっ……ひつくつ」

また身体が跳ね上がる。

「いいみただね。もうぬいじゃあつか」

「うん」

いつもより展開が早い、でも身体は互いを求め合い、準備を整えつつあった。最後の一枚を脱がされ、二人は生まれたときと同じ姿になった。

15、高まる想い

15、高まる想い

ベッドに座っている僕はスーツ姿、昼間と同じ格好である。シャワーは彼女に勧められて先に済ませた。思えば夜に彼女を抱くのは本当に久しぶりだ。

妹はさみしがり屋で僕がそばにいることをいつも望んでいた。そのため休日のデートも妹が出かける日だけ、もちろん一緒にホテルに泊まることはない。

だから彼女を初めて抱いたのも昼間のホテル、それからデートだというのにほぼ1日ホテルで過ごすことさえあった。でもそれは妹も同じかもしれない。家では兄妹一緒に暮らす、それが当たり前のようになっていたから。

しばらくして彼女が若干濡れた髪に、パジャマ姿で現れた。ちなみに僕のスーツ姿は彼女が最も気に入っている格好らしい。とはいえ彼女を抱くのはいつも休日の昼間、私服姿のときがほとんどだった。一方彼女のパジャマ姿は僕の好み、これは少しでも夜に家で一緒に寝る雰囲気が出たからだ。

彼女は少し恥ずかしそうに顔を赤らめながらも、僕の横に座る。すると二人は向き合い、彼女は少し笑って左手の人差し指で自分の唇に触れる。キスの合図だ。背中に手を回し、そつと唇を触れさせた。

「はあっ……ふっ……、ちゅぱ……ちゅっ……ふっ……はあっ……はあっ……ちゅっ……ちゅっ……ちゅぱ……はあっ……」

さほど激しいキスではない、でもゆったりと舌を絡ませ合い、長い間快感に酔いしれた。

5分以上に及んだキスのあと、見つめ合う二人。

「脱がせて」

彼女は僕の右手にちよつと触れると、そう呟いた。頷いてボタン上

から一つずつ外していく。途中で当たる柔らかい胸の感触、僕は昨日触れた妹のものと同じように思えた。一番下まで外して袖を通して脱がせると、かわいい薄い水色のブラジャーに包まれた胸が露わになる。

「きれいだね、サキ。かわいいよ」

「ありがと。さわって」

「うん」

まず胸に触れる前に肩に両手を置き、体重をかけるとそのまま彼女を押し倒した。ブラジャーの上から胸を揉みはじめ。彼女の胸は特別ではないが、十分大きくとてもふわふわしていて弾力があり柔らかい。

「はあっ……はあっ……ふううん」

口から漏れるいやらしい喘ぎ声。ためらいながらも自然な反応が、上品で嬉しかった。

「とってもいい？」

「うん」

フォック外してブラジャーを取ると白く肌色きれいな膨らみと、さくらんぼのように赤い頂点が現れた。舌を出して先っぽをペロツと舐める。

「ひいあっっ、ひっくっ!!」

もう敏感になってきているのだろう、声を上げて身体が跳ね上がる。

「感じるの？」

「うん。ねえ、したもさわって」

「分かった」

今日の彼女はいつもより積極的だった。ズボンを脱がせて、ブラジャーとセットのパンティーが露わになる。人差し指で真ん中に触れるとくちゅっとな音がしてもうそこは湿っていた。

「濡れてるね、サキのこ」

「はやくっ」

「分かったよ。でも僕も脱ぐからちょっと待って」

待ち切れないのだろう。僕もスーツを脱いで急いでパンツ一枚になる。そしてパンティーを脱がせると、自分もパンツを脱いで裸をさらけ出した。

16、白い想い

16、白い想い

彼の前、わたしは今何もつけていない裸の状態だ。恥ずかしいのは何度やっても一緒、たまらず顔を両手で覆って隠す。

「恥ずかしいの？ ミキ」

「う、うん」

指と指の間から問いかける彼をのぞき、小さな声で頷いた。

「赤くなってる顔、見たいな」

「そ、そんな」

真つ赤になっている顔を見せる、そんなことはとても自分からはできない。

「見せて」

やっぱり無理矢理に覆っている手をどかされてしまった。

「かわいいよ、ミキ」

「いやあ……」

彼はそう言つと唇を合わせてきた。同時に右手で下の敏感なところをいじられる。

「はあっ……ひくっ……ひいああん、ちゅう……ち

ゅぱ……ひいっ……」

身体が反応してまってキスに集中できない。

「ちゅうううー……ジュルル……ちゅう……はあっ……ひい
つつくっ……」

それでも彼が強引に唇を吸ってきたので、快感に耐え切れず身体を跳ねさせてしまう。すると彼の顔が離れて解放された。しかし今度は舌でさらに濡れているところを舐められる。

「ひいっ！ いやああ！ だめっ！ だめだよ、そこは」

「すごい！ ほらいっぱい溢れてくるよ。ちゅう……ジュルル……」

「はあっ！ だめっ！ すっちやいやああ！ ひいあっ！」

「いいみたいだね。もっと気持ちよくしてあげる」
そして一番敏感なところを舐められながら、指を中に出し入れされる。

「ひいっ！！ はあっ！ そんな……だめっ！ だめだつてば！
きちやう……ひっくっ！ きちやうよ！」

「愛しているよ、ミキ」

「はあっ！ わ、わたしも………ひいあっ！ すきだよ！ だい
すき！ ひいああん……ひいっ！ ひっくっ！ ひいあああ
ああ！！」

こうしてわたしの身体は一度目の絶頂を迎えてしまった。

「かわいかったよ、ミキ」

軽い放心状態のあと目を開けると、彼に優しく頭をなでられている。

「ありがとう」

恥ずかしい、恥ずかしいけど素直に嬉しかった。次は自分が応える番だ。

身体を起こしてすでに大きくなっている彼のものを握りしめる。

「ふふっ、すごく熱くなってるね」

「ミキが魅力的だから」

「そうなの？ じゃあ気持ちよくしてあげる」

そう告げると先っぽのあふれてる水滴を舐めとり、舌をゆっくりとはわせていく。上目づかいで彼を見ると少し上を見上げ、とても気持ちよさそうな表情をしている。

「はあっ、いいよ………すごくいいよ、ミキ」
「ふふふっ」

今度は口で深く啜えこみ、舌をはわせながら頭を上下させる。

「ああっ！ それいい！ 気持ちいいよ！！」

彼の反応は恥ずかしがることなく、いつも素直だった。でもそれが嬉しくて、余計にわたしはがんばりたくなる。

しばらく頭を動かしているときつくなくなってきたので、添えている右

手を上下させて、舌を出して濃厚に舐める動作に切り替える。

「はあっ、やばい！ それは……ちょっと！」

「ふふっ、どうしたの？」

一旦舌を離し、手を動かしながら彼に問いかける。

「出ちゃっよ！ そんなにしたら」

「いいよ、出して。わたしにいつぱいちょうだい」

そう言ってまた啜えこむと、舌を敏感なところにあて手の動きを激しくしながら、先っぽを“ちゅっっっ”と吸い上げた。

「わあっ！ や、やばい！ で、出るー！！」

すると一瞬彼のが“びくっ！”と脈打って大きくなり、白い想いで口いつぱいになった。

17、感じさせたい……

17、感じさせたい……

久しぶりに見るサキの裸姿、ちょうどいいくらみの胸と腰のきれなくびれのライン、肌も透き通るように白く美しかった。

「きれいだ、サキ」

「ありがとう」

「さわるね」

「うん」

彼女が頷いたのを確認すると人差し指で下をゆっくりなぞってみる。

「ああん……ふうっ」

軽く喘ぎ声をあげて喜んでいる。しばらくは時々一番敏感なところに指を触れさせながら、優しくなぞる動作を続ける。

「はあっ……… ああん……… ひいつ！ ひいい……… いやっ………

……… ああん……… ひっくっ！ はああん……… ひいいいん……… だめ

っ……… はあっ……… ひいやああんっ！」

指が敏感なところに触れたとき声が少し高くなって喘ぎ、「びくんっ！」と身体が跳ね上がった。

「はあっ………ふうっ………。ねえ、シンヤ君」

「ん？ なに？」

「なめてみて」

「分かった」

気持ちが昂ぶってきている彼女、次の刺激を求めている。僕はずつと目を見つめ合っていた顔を下に移し、舌を出すと一気にそこを舐めあげた。

「はあっ……… ああんっ……… いいつ！ すごくいいよー！」

どうやら彼女は触られるよりも舐められるほうがより感じるようだ。先ほどと同じように時々敏感なところを舐めつつ、中を吸ったりしてみる。

「はああん……ひいつ！ ああん……はあっ……いやっ！ ああ
っ……だめっ……だめだつて！ だめだつてばー！」

「だめなの？ じゃあ、やめる？」

「いや、だめっ！ やめないで」

「そう。ならちゃんとお願いしないと」

「えっ!？」

もちろんじらすことも忘れない。彼女は少し驚いて目をぱくりさせている。さつきまでほとんど恥ずかしがらずに身を任せていた彼女、でも快感を求めている、それを口に出してまでお願いすることは恥ずかしいようだ。

「ほら、言わないとホントにやめちゃうよ」

もちろんやめる、はなからそんなことする気はない。ただ彼女の恥ずかしがる姿、それがとてもかわいかった。そして彼女も実際に感じている身体の反応にうそをつくことはできない。

「お願い、私をもっと感じさせて」

「はい、よくできました」

顔を赤くしながらも正直に自分の気持ちを口にした。それを受けて今度は両手で胸のふくらみの頂点をいじりながら、下を舐めつつ吸い上げてみる。

「はああんっ！ いやっ！ それいい！ ひいやああん……」

……はあっ……ふうっ、ひいつ……はあっ……いやっ！ すっち

やいやっ！ はああんっ！ はあっ……なにか来るー！ きち

やうー！ きちやうよー!」

彼女の限界は近い、膨らみに触れている片方の手を下に移し、中を一気に吸い上げ一番敏感なところを強く押してみた。

「はあっ……ああんっ！ いやあっ!! それだめっ！ こわれ

ちやうっ！ ひいつ！ ひっくっ！ ひいやあああああ

ん!」

そうして彼女の身体は激しく跳ね上がり、一度目の絶頂を迎えた。そのあと少し放心状態だった彼女、しばらくして身体を包み込むよ

うにして抱きしめ、おでこにキスをすると目を覚ました。

「きれいだったよ、サキ」

「すごくよかった。ありがとう」

彼女が見せる満面の笑顔、それがとても嬉しかった。

18、そのままの想い

18、そのままの想い

口の中いっぱい広がった彼の白い想い、それはいつもより量が多くとても濃い気がした。

「ゴク……………ゴクッ……………ゴクンッ」

舌でそのえっちでいやらしい味を感じつつ、上目づかいで彼を見つめながら飲みこんでいく。飲むのは別にいやではない。むしろ彼が喜んでくれた愛のあかし、全部受け止めてあげたいくらいだ。

「ミキ……………、そ、そんな目で……………」

一方彼はわたしに見つめられて少し罪悪感が芽生えているようだ。でも本当は嬉しいに違いないはずだ、最初に彼に奉仕してあげたとき、できれば飲んでほしい、そうお願いされたのだから。ただわたしがあまりにおいしそうにしているのがちょっと気になるのかもしれない。

「……………ゴクンッ。ふうっ……………。すぐいっぱいだな」

全て飲み干したあと、ゆっくりと口を離して笑顔で言った。

「ミキ、そんな全部飲まなくても……………」

「ふふっ、何言ってるの？ 最初にお願いしたのはそっちでしょ」

「そ、そうだけど……………」

「嬉しくないの？」

「嬉しいけど、無理してない？」

「してるように見える？」

「さ、さあ？」

「おいしかったよ、ありがとう」

戸惑って目を合わせられないでいる彼、わたしはそう告げてほっぺたにキスをした。何も返せず顔を真っ赤にする、ちょっと主導権を握れた気がして嬉しかった。

「ねえ、ところでこれ、大きいままだね」

1 回出したくらいでは当然熱くまだ大きいまま、先っぽを指でつつきながら話しかける。

「えっ、まあ……」

「つづきしよ」

「そうだな」

すると二人は体勢を変えて、わたしが仰向けになって足を開き、彼がその上に覆いかぶさる。

「あっ、待てよ。ちゃんとしないと」

「待って！」

体勢がととのつてすぐ、彼はそばの引き出しに手を伸ばす。おそろくわたしと1枚隔てる壁をつけようとしているのだろう。でも近いうちに結婚する、だからわたしはそのままの彼を感じたいと思っていた。

「えっ、なに？」

「そのままでしょう」

「いいの？ しなくて」

「うん。だってもうすぐ結婚するんでしょ、わたしたち」

「で、でもなあー……」

「いや？」

「いや、したいけど……」

「じゃあ、しよう」

彼は悩んでいる。別に優柔不断で弱気になっっているわけではない。わたしのことをすごく想っていて、本当に大丈夫かよく考えてくれているのだろう。その心づかいが素直であたたかくて、とても嬉しい。それならわたしも正直に彼の背中を押してあげる。

「わたし、ほしいよ、二人の愛のあかし」

「……そうか、分かった」

少し考えた彼、でも笑顔で頷いてくれた。

改めて体勢をととのえた二人、熱くて大きいのがわたしの中心にあ

てがわれる。

「入れるよ」

「うん」

わたしが目を見つめて頷くと、ゆっくりと彼のが入ってきて、とて
も熱くいっぱいになった。

19、最高の感覚

19、最高の感覚

サキが絶頂を迎えたとき、僕のもこれまでで一番大きくなった。先っぽからはかわいそうなくらいに水滴が溢れてきている。

ベッドに座って向き合う二人、彼女は僕のを両手で優しく握りしめる。

「すごく大きくて……熱いね」

「サキがほしいうて言ってるよ」

「ふふっ、なんか出てる」

そう言って彼女は僕の先から出る水滴を舌先で舐めとる。

「ああっ」

気持ちのいい感覚に思わず声が出る。

「おいしい。いいよ、いれて」

「分かった」

彼女を仰向けに寝かせて、自分はその上に覆いかぶさって体勢をととのえる。入れる前、中心に最高に大きくなっているそれをあてがい敏感なところに触れる。

「はあっ……ああんっ、はやくう〜」

「ちよっと待ってね、つけるから」

「あっ、いいよ。そのままで」

「えっ!？」

「今日は直にシンヤ君を感じたいから……」

「でも……」

「いや？」

「したいけど……」

「だって結婚するんでしょ、私たち。二人の愛のあかし、つくろっ」

「……そうだな」

少しだけ考えて僕は決意した。意を決して大きなそれを入り口から

中にゆっくりとうずめていく。実は今まで妹との暮らしもあってか、一度もそのまま入れたことはなかった。初めて味わう感覚、周りから執拗にまとわりついてきて容赦なく僕のを攻め立てる。

「はあっ、すごい！ 熱い！ 大きくて熱いよ！」

「サキのも……はあっ、すごいまとわりついてくる！」

「ねえ、動いてみて」

「うん」

僕は彼女としつかりと目を合わせて頷き、腰を振り始める。

「はあっ、ちよっと！ シンヤク……うん……ひいいっ！ ひ

つくっ！ はっ、はげしすぎる〜」

もう止まらなかった。今まで感じたことのない最高の快感に溺れ、夢中で腰を動かした。

「ひいやあ！ いいよ！ すご〜く……はあっ……だめえ……

……だめっ！ だめだつてば！ きもちいい……よ、よすぎ！

！」

始めは戸惑っていた彼女、でもしばらくするとすっかり押し寄せてくる快感の虜になっている。

「はあっ、はあっ、はあっ……ここは……どっ？」

「あああ！ ！ ！ いいっ！ そこ、いいよ……もっ……もっ……

……とおお！」

彼女の要求に僕は身体を起こさせ、最高に激しく突き立てた。

（わあっ！ や、やばい。もうあまり持ちそうにない）

「はあっ、ひいいいやああああ！ もうだめ……きちやう……き

ちやうよー！！」

彼女の限界も近い。僕はなんとか想いをこらえつつ、半分無意識のうち右手の指で敏感なところを強く押す。

「ひいいいいっ！！ そこはだめ！ だめだつてば……ひいや

ああっ！ ひいいっ！ ひいやああああああん……」

「ぼくも……はあっ、で、出る……」

その瞬間彼女は弓なりに身体をのけぞらせ、僕は胸に頭を押しつけ

て倒れこんだ。

20、熱すぎる想い

20、熱すぎる想い

「熱い！ 熱いよ！！ コウタくん」

「ミキのも……はあつ、すごい！ 気持ちいいよ！」

「ねえ、まだ動かないで……」

「えっ、どうして？」

「もう少しこのままでいたいから」

「分かった」

実はそのままの彼を受け入れたのは初めてだった。彼は決して自分勝手な人なんかではない。すぐくわたしのことを想ってくれていて、一度もそのままではいたなんて要求してきたことはなかった。

一方わたしも今日お願いしたのが初めて、今までも自分の身体の状態は把握していて大丈夫な日もいくらかはあった。でも兄と一緒に楽しい生活、それが壊れるのがいやで進んでやる気にはなれなかった。

その中で今決意したこと。兄にもわたしと同じように愛したい存在がいる。兄妹は確かに恋人に比べてつながりは強い、しかし恋人同士の愛し合う気持ちはその何倍も強いはずだ。だからわたしは愛し合っている、そのあかしを授かりたいと思った。

そして実際に彼を直に感じてみて、熱かった、本当に熱い想いだっ

た。

「キスしてもいい？」

「うん」

わたしがうなずくと彼に少し身体を持ち上げられ、唇が合わさった。

「ちゅぱ……はあつ……ちゅううう……ちゅぶ、ちゅぱ……

……ジュルル……ちゅううう……ちゅうう……ふっつ」

舌を絡ませ合う激しいキス、しばらくして唇を離すと彼は腰を動か

「ミキ、ごめん。もう、我慢できない！」

珍しく自分を抑えられなくなっている彼の姿、でも正直で、熱い想いが伝わってきて、嬉しかった。

「はあっ……、すごい！ そんな……いきなり……ひいやあああ！」

彼の動きはいつもと違ってとても激しく、奥の奥まで届いてきた。直に感じる感触がすごく熱くて、大きくて気持ちいい。

「ひいやあっ！ いいよ！ すごく……はあっ、いいよ！！ もつと！ もつとついて！」

わたしも段々快感に溺れ、夢中になっていく。

「はあっ、はあっ、はあっ、………ミキ！ すきだ！ あいしてる！！！」

「はあっ、ひいやあああ！ わたしも……すき！ コウタ………
…く……うう……んが！ ひいいいっ！ そこいいいっ！ もつと！

もつとおー！！」

わたしの要求に彼の動きが最高に激しくなる。二人は短い間で急激に昇りつめていった。

「はあっ、はあっ！ もうっ、もうだめ！ がまん………できない
い
い」

「いいよ！ わたしもだめえ！！ もうくるー！ きちやう！ ひ
いやあああ！ きちやうよ！！！」

「ミキ、いっしょに！ いっしょに！！！」

「ひいああっ！ こわれひやうう！ わたし！ ……こわれひ
やうううよ！ ひいいいっ！ ひいやあああああ！！！」

「はあっ、はあっ！ だめだ！ で、出る！！！」

同時に絶頂を迎えた二人、その瞬間わたしの中は彼の熱い想いでいっぱいになり、心の底から満たされていった。

20、熱すぎる想い（後書き）

どうでしたか？ これで今回の性的描写のシーンは終わりです。

次回からまた通常のシーンに戻ります。

これからもよろしくお願いします。

21、彼女の願い（前書き）

ここからはまた通常のシーンに戻ります。
引き続きよろしくお願ひします。

21、彼女の願い

21、彼女の願い

金曜日の朝、僕は目覚めたとき裸だった。隣ではサキが同じように何もつけていない姿でまだ眠っている。昨日は夢中になって愛を貪り合った二人、最後は互いに疲れ果ててそのまま眠ってしまったようだ。

時計を確認するとまだ8時少し前、ここは会社からさほど遠くないので、ゆっくり準備をする時間はありそうだ。

そばに脱ぎ捨てられていたパンツと上からガウンを着て立ち上がり、カーテンを開いてみる。すると外の明るさが部屋に差し込み、待っていたかのように彼女が目を覚ました。

「はあ、あつ。おはよう！」

「おはよう」

僕は再びベッドに戻り、彼女と話し始める。

「ふうっ、ちよっと寒いね」

「だな。暖房つけようか」

「うん」

昨日の夜は愛の温度で意識しなかった寒さ、暖房をつけると冷える身体が少しずつ温まっていった。

「今何時？」

「8時少し前だよ」

「よかった、寝坊してなくて」

「そうだな」

当然目覚ましなど合わせているはずもなく、寝坊しなかったのは幸いである。

「ねえ、シンヤ君。明日、デートしよう」

「いいね、そうしよつか。じゃあ、どこに行く？」

「えっとね……、映画を一緒に見るってのはどう？」

「映画か。何か見たいのがあるの？」
「うん。今ちようど大ヒットの恋愛物がやってるから」
「あつ、それつてもしかして「人肌」っていうのかな？」
「それだよ、それ。」
「やっぱり、僕もサキと見たいと思ってたんだ」
「じゃあ、決まりだね」
「うん」
「あともう一ついいかな？」
「なに？」
「明日、プロポーズしてくれるんだよね」
「するよ、もちろん」
「ならその前にさ、妹さんに会わせてくれないかな？」
「妹にか……、分かった、話してみるよ」
このとき僕はまだ気づかなかった、彼女の提案が驚愕の真相につながっていることを。でもそれはある意味で彼女が願ったとても嬉しい真相だったのかもしれない。
「ありがと。そろそろ出る準備しようか」
「そうだな」
「あつ、待つて！ 最後に忘れてた」
「なに？」
「今日はまっすぐ早く帰つてあげてね」
「えっ、どうして？」
「悲しむと思うから……」
「……そういうことか、分かったよ」
それは彼女が見せたミキへの小さな優しさだった。そしてベッドから立ち上がった二人、まずは身体をきれいにするため一緒にシャワーを浴びに向かった。

22、小さな優しさ

22、小さな優しさ

金曜日の朝、わたしは目覚めたとき一人ベッドの中だった。身につけているものは何もなく、完全に裸の状態だ。

「おはよう、ミキ」

聞こえてきた声、まだはつきりしない視野の中ですでにスーツに着替えた彼を発見する。

「おはよう」

「きれいだよ。天使みたいだ」

「天使？」

「ほら、光に照らされて輝いてみえる」

「えっ、きゃっ！」

気がつくとも窓から差し込む光に照らされていた自分の身体、急に恥ずかしくなって布団で隠す。

「ははっ、恥ずかしいか」

「うん。ところで今何時？」

「8時過ぎだよ」

「ふっつ、よかった。寝坊してなくて」

「そうだな」

「もう着替えたんだね」

「20分前に起きてたからね。ミキもシャワー浴びてきなよ」

「わかった」

彼がおいてくれたのだろう、バスタオルで身体を隠して、着替えを手に持ちシャワーを浴びに向かった。

お湯を出す前に感じた少しだけ残っているえっちな身体の香り、昨日の彼との愛の時間を思い出して嬉しくなった。そしてシャワーのお湯は、それらを全てきれいに洗い流し、わたしの身体を新たに生まれ変わらせる。

シャワー室から出たときの自分の身体、それは今までで一番きれいであたたかい気がした。

「おつかれさま」

「ねえ、コウタ君」

「なに？」

「わたしを少し抱きしめてみて」

着替えを済ませて部屋の中、向かい合った二人、わたしは伝えたいことがあつて彼にお願いした。

「分かった」

服を通して感じられる彼の大きくて心強い愛、これからもずっとわたしを守ってくれる、そう確信ができて嬉しかった。

「ありがとう。わたしをずっと愛してね」

「もちろん」

しばらくして抱きしめ合った身体を離し、ベッドに並んで座る二人、もう少しだけ時間がある。

「なあ、ミキ、明日デートしよっか」

「うん」

「何したい？」

「うーん、……今人気の映画があるからそれみたいなの」

「映画か、いいね。それ題名は？」

「「人肌」だよ。知ってる？ コウタ君」

「ああ、知ってるよ。ちょうど僕もミキと一緒に見たいと思ってたんだ」

「ホント！？ よかった」

「じゃあ、決まりだね」

「うん。どこで待ち合わせする？」

「いつもの公園に朝9時でどう？」

「9時か。わかった、大丈夫だよ」

「よし！ そろそろ行くか」

「うん」

立ち上がる彼、わたしは横に立って腕をつかみ身体を密着させる。

「あっ、ミキ。一つだけ忘れてた」

「なに？」

「今日はまっすぐ早く帰れよ」

「えっ！ どうして？」

「きつと待ってるだろうから」

「……そうだよな、わかった」

彼が見せてくれた兄への小さな優しさ。兄妹の絆の強さをよく理解してくれているのがわかって嬉しかった。

23、最高の信頼

23、最高の信頼

金曜日の夜7時過ぎ、僕は珍しく妹よりも早く家に帰りついていた。今は妹の部屋の台所で晩御飯のコロッケを作っている。コロッケは二人の大好物だ。

ちなみに僕ら兄妹は服や布団だけでなく、カーテンやカーペットなどを含めた部屋のコーディネートもよく似ている。もちろん鍵もお互いの部屋を自由に行き来できるように、両方とも持っている。そのためたとえまだ帰ってきていなくても、妹の部屋に入ることができた。

「ただいまー」

7時半を少し過ぎたころ、玄関から妹の声が聞こえてきた。電気がついていながらも全く不審がることなく、むしろ満面の笑みを浮かべ喜んでいようだ。

「おかえりなさい」

「おにいちゃん早いね」

「うん、サキに言われたんだ、昨日。早く帰ってあげてねって」

「あっ、それわたしも一緒、コウタ君に言われたよ」

「そうか。それでどうだった昨日の夜は？」

「何聞いているの？ おにいちゃんのえっち、何したかわかってるんでしょ」

「あはははっ、ごめん、ごめん」

「もうっ、……………でもよかったかな、すごく」

「僕もだよ。ためらわずに愛し合えたから……………」

「わたしも。……………知ってよかったよね、恋人がいたこと」

「そうだな」

初めて話したそれぞれの恋人同士とのえっちの感想、少し恥ずかし

かったけど、なんだか新鮮で嬉しかった。

「ねえ、今日の晩御飯、もしかしてコロッケ？」

妹がカウンタ―からキッチンを覗き込んで聞いてくる。

「そっだよ」

「やったー！ わたしコロッケ大好き！」

大好物の登場に妹は子どものように手を挙げて喜んでいる。どうやらメニュー選択は上手くいったようだ。

「あと揚げるだけだから着替えて座って待っててね」

「はい」

僕がそう言つと妹は一度キッチンから離れ、着替えをしに寝室に向かった。

ここまできて今さら思つのもなんだが僕ら兄妹は本当に仲がいい。お互いに部屋をよく行き来し、長い時間一緒に過ごすことはもちろん、時には寝るときでさえも隣同士。さらに鍵を持ち合っていることは、許可なく部屋に出入りできることを示していた。

つまりそれぞれのプライバシーはほとんど確保されていない状態で、それは異常だと言われても仕方がない。でもなぜだか限りなく自然で、楽しくて、すぐそばにいるから安心できる。今二人はまさに最高に信頼し合っている状態だった。

24、わたしの願い

24、わたしの願い

だからこそ二人にとってお互いの結婚は非常に重要な出来事だった。それは自分より信頼できる存在を相手に許すということ。そのためには大きな覚悟と決意が必要である。

昨日彼にお願いしてした隔たるもの無しでの行為、そこにはわたしの強い決意が現れていた。さらに実は身体の状態はかなり危険な日、もう後戻りはできなくなる。それほどの重いリスクを覚悟し、未来のために必要としていた。

兄も昨日彼女と一緒にホテルで泊まったこと、それは今日メールで知った。どんな風に愛し合ったのだろう、どのくらい強く求め合ったのだろう。兄もわたしと同じように大きな覚悟と決意をしてくれたのだろうか。

そしてわたしのお腹の中に彼との愛のあかしが宿っていてほしい、兄も彼女に宿させていてほしい、それがわたしの願いだった。

「ミキー！ ご飯できたよー！」

「はいー！」

わたしがメイクを落として着替えが終わったのとほぼ同時に、兄の声がキッチンから聞こえてきた。たくさんのコロッケとサラダとご飯、みそ汁を前に二人は向かい合って席に着く。

「いただきますーすー！」

さっそくコロッケを一つとって口にほおばる。料理は二人ともほぼ同じくらいの腕前、でも味付けは好みもあってか少し違う。兄のコロッケは下味がしっかりしていてソースをつけなくても十分おいしい。

「どうかな？」

「うん、おいしいよー！」

「よかったー」

久しぶりに食べた兄のコロッケ、なんだか幸せな気持ちになれてとてもおいしかった。

「あつ、そういえばさ、明日彼とデートに行くんだけど、いいかな？」

「大丈夫だよ。僕もサキとデートすることになったから」

「そうなんだ。何時に出るの？」

「8時過ぎぐらいかな。待ち合わせが9時だから」

「わたしも同じだよ。ねえ、途中まで一緒に行ってもいい？」

「もちろん」

「やったー！」

今まで彼とデートに行く日はこっそり朝早く出発していた。だから一緒に行くのは初めて、兄の幸せそうな顔が見られると思うとすごく嬉しい気分だ。

「そうだ。一つお願いされたことがあるんだけどいいかな？」

「なに？」

「サキがミキに会いたって」

「わたしに？」

「そう。プロポーズする前に会わせてほしいって言われたんだ」

「……ちょっと待って、それって家に来るってことだよな」

「そうだよ。いや？」

「いやじゃないけど、……じゃあ、わたしも連れてきていいかな」

「いいよ、もちろん」

「なら明日お願いしてみよつと」

「ミキの彼氏に会えるのか、楽しみだな」

「わたしも、サキさんに会えるのすごく楽しみ」

「そうか。明日は忘れられないデートになりそうだな」

「うん！」

それぞれの恋人がわたしたちの家に来る、兄が見つけた最高の女性。どんなに素敵な人だろう、少し悔しいけどとても楽しみだった。

25、白いそと

25、白いそと

土曜日の朝、僕は身体が揺さぶられるような感覚で目を覚ました。「ねえ、おにいちゃん、起きて！」

そばで妹の声がする。僕は寝返りを打って向かい合う。昨日も結局隣同士で一緒に寝た二人、ただ布団は別々だった。

「どうしたの？ ミキ」

「起きた？ じゃあ、早く外見てよ！」

「そと？ 何かあったの？」

せかす妹は無理矢理手をつかんで僕を起き上がらせる。すると掛布団が身体から落ちて、急に寒さを実感する。

「寒いなー」

立ち上がってリビングに歩いていき、カーテンを思いっ切り開いてみた。

「雪か。どつりで寒いわけだ」

「でしょ」

「でしょ……て、もう少し優しく起こしてくれないかな」

「ごめん。だつて早くおにいちゃんにも雪、見てほしかったんだもん」

「まあ、久しぶりだもんな、こんなに降ってるのは」

「うん。わたしすごく嬉しい」

「ミキは雪好きだな。あれ？ そういえばその格好？」

ふと横を見ると妹は明らかに寝るときは違う格好をしている。

「気づいた？ パジャマじゃ寒いからもう着替えちゃった」

「そうだったんだ。何時に起きたの？」

「6時過ぎかな」

「早いね」

「うん。寒くて目が覚めちゃったから」

「よく似合ってるよ、着ている服」

「ホント？ よかったー」

その場でくるっと回って妹は全体を僕に見せる。上は去年自分で編んだ薄いピンク色のセーター、下はひらひらの白い短めのスカートを穿いている。髪はポニーテールで後ろに結んでいた。

「あとこれにマフラーして、今日はコートも着ないといけないかな」「そうだな。外は相当寒そうだし。あつ、ところで今何時？」

「えつとね、……7時少し前だよ」

「もうそんな時間か。じゃあ、僕も自分の部屋で着替えてくるよ」

「わかった。わたし朝ごはん作っておくから一緒に食べようね」

「いいよ」

二人はベランダのそばを離れ、布団をしまつて僕は自分の部屋に、妹はエプロンをしてキッチンに向かった。

部屋を移るのに玄関を開けて出た外、そこはいつも以上に寒く下の道路には降りしきる雪が積もっている。

“はあー”と軽く息を吐いてみる。それは一気に白く染まり、よりいっそう寒さを僕に感じさせた。

26、落とした涙

26、落とした涙

兄が自分の部屋で身支度をしている間、わたしは朝ごはんを作る。今週一緒に食べるのは今日で4回目だ。メニューは和食、豆腐とわかめのみそ汁に炊き立てのごはん、それと焼鮭である。

もうすぐこうやってわたしがごはんを作ってあげることができなくなる。兄が作ってくれたごはんも食べられなくなる。そう思うとさみしさで目から涙があふれてきた。

「あっ！」

涙がほほをつたって落ちた先、それはちょうどふたを開けたみそ汁の中だった。“ やっちゃった ” とは思ったものの、兄に食べてもらえるならなぜか嬉しかった。

しばらくしてテーブルに朝ごはんが並んだころ、身支度を済ませた兄が入ってくる。

「お待たせー」

「ごはんできてるよ」

「おっ、今日は和食か、久しぶりだね」

「うん。寒いし、みそ汁が食べたくなったから。座って」

「いいね、おいしそう。いただきますーす」

「いただきます」

向かい合って席に着いた二人、朝ごはんを食べ始める。兄はまずごはんを片手に焼鮭に口に運ぶ。

「どうかな？ 塩加減」

「ちょうどいいよ。おいしい」

「よかった」

難しい焼き魚の塩加減、わたしは兄の笑顔にホッと胸をなで下ろす。二人は外食することはほとんどなく、平日の昼以外は家で食べてい

る。食材はそれぞれが買って自由にそろえていたが、わたしの家で食べることのほうが多く、足りないときは兄にもらいに行ったり、一緒に買い物に行ったりした。

「あっ、そういえばさ、サキさんて料理上手なの？」

「上手いよ。何度かデートのときに弁当を作ってきてくれたよ。すごく美味かったなあー」

「そうなんだ。じゃあ、わたしの作るのとどっちがおいしい？」

「えっ、……それは選べないよ、どっちも同じくらいおいしいから」「それホント？」

「ホントだよ。信じられない？」

「うーん……、じゃあ、信じる」

「ははっ」

わたしの言葉を聞いて軽く笑った兄、するとみそ汁を飲んだ後思わぬことを聞いてきた。

「ん？ あれ？」

「どうしたの？ なんかな変な味した？」

「いや、そういうわけじゃないんだけど……。さっき、もしかして泣いてた？」

「えっ！？ い、いつのこと？」

「ほら僕が着替えている間に」

(どうしてわかるの？ 泣き声は出してないはずなのに)

兄の直感なのだろうか、わたしは正直に泣いていたことを明かす。

「少しだけ泣いたかな。でもどうしてわかるの？」

「みそ汁がいつもより少ししょっぱい気がしてさ、涙でも落ちたのかなって」

「そ、そこまでわかるの？ ごめん、さっき少しはいちゃった」

「いいよ。それよりどうして泣いてたの？」

もうすぐごはんをあまり作ってあげられなくなる悲しみ、わたしは気持ちを話してみた。

27、涙の訳

27、涙の訳

いつもより少ししょっぱかったみそ汁の味、そこから僕は妹が流した涙を感じとった。

恋人がいたこと、今日お互いに会ってプロポーズをすること、この1週間現実を意識して二人はたくさん涙を流した。でも本当はそれだけではない、結婚は本来二人にとって嬉しいこと、祝福してあげるべきこと。

だから今妹が流した涙の訳を聞いておきたかった。

「作ってあげられなくなるから……」

「ん？」

「料理。だつて結婚したら隣同士に住めなくなるんだよね」

ついに口にした、分かっていった、僕も妹も、お互いに恋人がいることを知ってから、いやもつと前から。でも避けてきた、ふれないようにしてきた、心が傷つくのを恐れて。

少しだけ考えて僕は決意した、これからの未来について真実を話すことを。

「そうだよ」

「おにいちゃん……ひっくっ、わたし、悲しい……」

「ミキ」

目からあふれだすたくさんの涙、それはほほつたつて何滴もテープルに落ちていった。妹が感じている悲しさ、今まで抑えてたときと違って本物だった。

「ミキ、今は泣いてもいい」

「えっ!? うええーん、ひっくっ」

「いつぱい泣いていい」

「うわあああーん、うわあああああーん、うん。うわあああああーん！」

僕は泣くのを許した。するといよいよ顔はくしゃくしゃになり、泣き声が大きくなる。

「でも一つだけお願いがあるんだ」

「うわああああーん！ ひっくっ……なに？」

「今日サキに会っても泣かないでくれ」

「うわああああーん、うわああああーん……うええーん、ひっくっ、

ひっくっ、……どうして？」

「考えてほしいんだ、気持ちを」

「ひっくっ、……気持ち？」

「ミキの気持ちはよく分かる。僕を離したくないんだよな」

「……うん」

妹はテーブルの上に置いてあったティッシュを取って涙を拭きながら頷いた。

「それは僕も同じ気持ちだ。でもさ、それをサキの前で出してはいけないよ。ミキの彼だって離したくないんだから」

「……そうだよな。わかった、わたし泣かない」

「約束だよ」

「うん」

落ち着きを取り戻してはつきりと頷いてくれた。妹はわかってくれたはずだ、4人それぞれ抱いている正直な気持ちを。だから僕はそれ以上何も言わなかった。

28、離したくない気持ち

28、離したくない気持ち

朝8時過ぎ、家と一緒に出た二人は傘をさして降りしきる雪の中を歩いていく。

ごはんを食べているとき、悲しさのあまり泣き出してしまったわたし、でも兄は気持ちをわかってくれていて、優しくなぐさめてくれた。嬉しかった、愛したい思いがもっと強くなった、ますます離したくないと思っただ。

わたしはさしていた傘を閉じて兄と目を合わせる。

「ん？ どうしたの？ 雪まだ降ってるよ」

「うんうん、いいの。おにいちゃんがいるから」

「えっ!？」

傘をさしたままだとじゃまになって近づけない二人、だからわたしは傘を閉じて兄の腕をぎゅっと抱きしめた。離したくない、その想いをしっかり伝えるために。

「これでいいでしょ、おにいちゃん」

「いいの？」

「うん。わたし離したくない、おにいちゃんのこと、絶対離したくないから」

「ミキ……」

わたしはよりいっそう強く抱きしめてそのあたたかさを感じながら、素直な気持ちを伝えた。

しばらく二人は歩き続けた、でも兄は何もそれ以上話してくれなかった。

兄は言ってくれた、わたしと同じ気持ちだと。それなら全身で愛を伝えてきてほしかった、もっと感じたかった、兄の想いも。わたし

はこんなに頑張っただけなのに。

また目に涙がたまってきた、あふれてきそうになる。でもここはぐっところであつた、さつき言われたことを思い出して。

結局ほとんど何も話さないまま駅に着いてしまった二人、電車に乗ればあからさまに抱きしめるなんてできない。ならもう終わってしまふのだろうか、誰にもじゃまされず想いを伝えられる時間は。

「えっ!?!」

駅の構内と外の間、屋根になっているところ、傘を閉じて兄は突然わたしを抱きしめた。

「ミキ、僕だつて離したくない、本当は離したくないんだ」

「おにいちゃん……」

本当に嬉しかった、わたしの想いが届いて。兄も全身で離したくない気持ちを伝えてくれた。

「でも僕は、……それでも僕はサキにプロポーズする」

「おにいちゃん、どうして?」

「もっと離したくないから、ミキよりもっと愛しているから」

兄の正直な気持ち、告白は衝撃的な言葉だった。でもわたしも気づいた、抱きしめられている中で、彼への強い愛が芽生えていたことを。

「おにいちゃん、ありがとう……。わたしも同じだよ、離したくない、本当は離したくない。でもわたしは、それでもわたしは結婚する、コウタさんと。おにいちゃんより離したくない、もっと愛しているから」

「ありがとう、ミキ」

まだ人の少ない朝早い休日の駅の屋根の下、想いを正直に告白した二人はさらに強く抱きしめ合った。

29、同じ兄弟

29、同じ兄弟

抱きしめたときの手の感覚、一人取り残された電車の中で僕はそれだけが印象に残っていた。妹は僕に正直に想いを告白してくれた、歩いている間抱きしめられていた腕はとてもあたたかくて幸せだった。でもその中で僕は気付かされた、このままではいけない、想いと断ち切らないといけない。だから僕は駅の屋根の下で思いつ切り妹を抱きしめた、今までで一番強く。そして

正直な想いを同じように伝え、同時に今思っている真実も口にしてお互いの身体は少し震えていた、辛くて切なくて悲しい気持ち、でも妹も真実を告げたとき、目の前の未来が開けて希望の光が差し込んだ気がした。

妹はすでに二つ前の駅で降りている。兄妹二人が勤めている会社は同じ電車の沿線沿いだが、間に二つ駅を挟んでいる。映画館はそのどちらからもほぼおなじ距離にあったので、待ち合わせ場所はいつもと同じ駅近くの公園になっていた。

しばらくして電車は駅に着き、僕は公園に向かって傘をさして歩いていく。近づくと道路に立って傘をさし、手を振っている彼女が見える。

「シんヤクーん！ おはようー！」

彼女の声が聞こえてくる。僕は手を挙げて駆け寄って行った。

「おはよう！ ごめん、待った？」

「うんうん、私もさつき来たところだよ」

「そうか、ならよかった」

「まずどうする？ もう映画館行っちゃう？」

「そうだな。何時からの上映だっけ？」

「10時15分からだよ」

「まだ1時間以上もあるのか、でもこっから映画館まで歩くと結構かかるよね」

「うん。じゃあ、バス使う？」

「バスか、いやでも歩いて行こう」

「えっ、いいの？ 歩きで」

「うん。そのほうがいろいろ話せるしさ」

「そっか、分かった。行こう！」

「うん」

並んで手をつなぎ公園を出た二人、一緒に映画館までの道を歩いていく。

「昨日は早く帰ってあげた？」

「うん、ちゃんと7時くらいにね」

「よかった」

「サキは？」

「私も早く帰ったよ。おにいちゃんのほうが先だったけど」

「そうなんだ。……ん？ あれ？ 一緒に住んでるの？」

「いや、同じアパートの隣同士だよ。でもお互いの部屋の鍵は持ってるんだ」

「えっ！？ それホント!？」

「どうしたの？ そんなに驚いた顔して」

「いや、僕と同じだなんて」

「そうなんだ。じゃあ、シンヤ君も妹の部屋の鍵持ってるの？」

「うん。だから先に帰って晩御飯作って待ってたよ」

「あっ、私も一緒。おにいちゃん晩御飯作ってくれた」

「そうか。ならメニューも一緒かもね、何？」

「同時に言おう！ せーの」

「コロッケ!!」

「コロッケ!!」

同じだった、隣同士に住んでいること、お互いの部屋の鍵を持って

いること、兄が先帰って晩御飯を作ってくれていたこと、さらにもそのメニューまでも、何もかも二人は。今まで変わっていると思っていた自分たち二人の兄弟関係、でも似ている人がすぐ近くにいると分かって少し嬉しくなった。

30、心のシンクロ

30、心のシンクロ

駅の屋根の下、想いをちゃんと相手に伝えあつて強く抱きしめ合つた二人、まさに最高に心が通じ合つた瞬間だつた。真実は辛く切なく悲しいものには違いなかつた、結婚すれば兄と離れ離れになつて生活しなければならぬということ。

でもお互いにはより愛している恋人の存在がある、その事実をはつきりと自覚し認識することができた。結婚すると今よりも素晴らしい幸せな未来が待っている、そう確信を持てた。

嬉しかった、本当に嬉しかった。悲しさをこらえてがまんしていた涙は、いつしか希望に満ちあふれた未来に感動する涙に変わつていった。

電車に乗ってから二人は何も話さなかつた、いや話す必要はなかつた。さつき抱きしめ合つたとき、完全に心がシンクロして、言葉がなくても想いを理解し合うことができるようになったから。兄はわたしの隣で優しい笑顔をしていた、幸せそうで今までで一番好きになれた表情。たぶんわたしも同じ顔をしていたと思う。

わたしの彼との待ち合わせ場所は、兄の降りる駅の二つ前。“じゃあ、行ってくるね”、“行ってらっしゃい”それだけ交わして先に電車を降りた。

改札口を出ると公園にいるはずの彼が立っていた。

「おはよう！ ミキ」

「あれ？ どうしたの？」

「待ち切れなくてさ、ここまで来ちゃったよ」

「そう。ごめんね、待たせちゃって」

「いいよ。こっちが早過ぎただけだから。それで、どうする？」

「うーん……、映画は10時15分からだけど、ここからじゃ結構かかるよね」

「そうだね、歩いて20分ちよつとかな。バスで行く？」

「いや、歩きのほうがいいかな、いろいろ話せるし」

「そうだな。じゃあ、行こうか」

「うん」

まず彼が大きな傘をさして先に道に出る。一方わたしは自分の持っている傘はささず、彼の腕にしっかりと抱きしめて中に入った。ちよつと朝兄と一緒に駅までの道を歩いたとき同じである。

「どうしたの？ ミキ。自分の傘はささないの？」

「いいの、こっちのほうが近づけるから」

「ははっ、そっか。分かった」

二人は駅を出て道を歩き始める。腕を通して伝わってくるあたたかい感覚、それは朝抱きしめた兄よりも大きくとても幸せな気持ちになれるものだった。

31、気づいた真相

31、気づいた真相

昨日の夜の話をする中で、僕ら兄妹がよく似ていたことに気がついた。でもそれと同時に二人の頭にはある疑問が浮かんできた。

「すごい！ メニューまで一緒。コロツケ、おいしかった？」

「おいしかったよ。……あれ？ でもちよつと待って」

「どうしたの？」

「確かサキの兄の名前って……」

「コウタっていうけど……、えっ、あっ、うそ！」

「だよ。もしかして、僕の妹のミキの恋人って」

「おにいちゃん……」

「ってことだよ」

「うん、たぶん」

今二人は気がついた、衝撃の真相に。それは二組の兄妹が偶然にも兄妹同士でつき合っていたということ。全く予想さえもしなかった真相、ただ嬉しいことには違いなかった。これならたとえ結婚したとしても離れ離れになる必要はない、なにしろ今までお互いに兄妹で隣同士に生活してきたのだから。

「そうだったのか。いやー、今まで気がつかなかったな」

「だね。でも嬉しいな」

「そうだね。なんかほつとしたよ」

「ほつとした？」

「ほら、兄妹同士なら結婚しても近くに住めるしね、職場も近いから」

「そっかー、なら離れ離れにならなくて済むんだね」

「そう、そういうこと」

「よかった。だって私おにいちゃんとずっと一緒にいたかったんだもん」

嬉しい真相が明らかになつて気分が少し舞い上がり気味になつて
いる二人。しかしちよつと考えてみると、僕は当たり前のこと忘れて
いた。

「あつ、でもさ、まだ決まつたわけじゃないよ」

「えっ!? どうして?」

「だつてまだ妹に聞いたわけじゃないしね」

そう、まだ確定したわけではない、お互いに全く確認していないの
だから。話をしている中で偶然が重なり、そうかもしれないことを
予想できたに過ぎない。

「そっかー、そうだよ。でも今日会えるんだよね」

「うん。妹も恋人を連れて来るって言つてたよ」

「じゃあ、そのときまでお楽しみってことにしとこ」

「そうだな。今日は気にせずにお楽しみもつか」

「うん!」

今日は気にしないで楽しむ、それが二人の出した結論だった。全く
予想もしていなかった本当に嬉しい真相、でもまだ確定はしていな
い。

ただここでお互いに電話をして事実を確認することもできた。あえ
てそれをしなかったのはもしかしたら逆の現実が明らかになつて、
ショックを受けることになるかもしれないから。

どちらにしても今日会うことになっているから、真実はそのときに
いやでも分かることになる。一番の楽しみはそこまで取っておく、
それが二人の出した答えだった。

32、四人の心づかい

32、四人の心づかい

わたしは抱きしめた、彼の腕を強く、やわらかな胸を押しつけて彼の顔を少しのぞき込んでみると、口を若干開いて歯を出して苦笑いを浮かべている。ちよつといやがっているようにもみえるが、本当は嬉しく思っているに違いない。

「ねえ、コウタ君、どうしたの？ 笑ってる？」

「えっ！ いや、べ、べつに、なにも」

図星なのだろう、受け答えから明らかに動揺しているのがわかる。ここでわたしはさらにちよつとからかってみる。

「ん？ じゃあ、なにも思ってるないの？」

「いや、……そういう意味じゃ……」

「じゃあ、どういう意味？」

「えっ？ それは……」

「言えない？」

「う、うん」

「じゃあ、やめたほうがいい？」

「いや、やめないほうがいいかな？」

「ホント？ じゃあ、言ってる正直にわたしに」

「な、なにを？」

「今の気持ち。そうじゃないとやめちゃうと」

彼はわたしの聞いていることの真意はわかっているのだろう、少し考えれば最初に腕に抱きついてきたのはわたしだと気づけるのだから。でもそこは悲しい男性、胸のやわらかな感触を押しつけられて冷静でいられるはずがない。

「わかった。嬉しいよ、ふわふわしてやわらかい感触が」

「ありがとう、言ってくれて。それでさ、一つお願いがあるんだけど」

「お願い？」

「今日プロポーズしてくれるんだよね、わたしに」

「ああ、もちろん」

「その前にさ、おにいちゃんに会ってくれない？ 彼女を連れて来るって言うてたから」

「いいけど。……あれ？ ちょっと待って」

「どうしたの？」

「ミキのおにいちゃんの名前ってたしか……」

「シンヤだけど……あっ、もしかして、えっ、じゃあ、サキさんって」

「僕の妹の名前もそうだけど……、う、うそっ！」

「そういうことだよ。わたし兄妹同士でつき合ってたってこと？」

「たぶん……」

「ホント、ねえ、ホントなの？」

わたしはあせった、今まで気がつかなかった驚愕の真相に。でもそれがもし事実なら本当に嬉しいことだ、兄妹同士なら互いに結婚しても離れ離れになる必要はないのだから。

「待ってよ、ミキ。まだわからないよ、ちゃんと確認してないんだから」

「あっ、そっか。じゃあ、どうする？ 今聞いてみる？」

「それは……やめとこう。もしかしたら……」

彼はここでは冷静だった、さっきまでわたしのやわらかい感触に動揺していたのに。でも今彼が言おうとしたことをわたしも察した。

「そうだよ、わかった。今日は気にせず楽しもう！」

「うん」

四人の出した答えは図らずも同じだった。

いずれにせよ今日会えば必然的にわかること、それはもし逆の現実が明らかになることも考えても心づかいだった。

33、一番あたたかいもの

33、一番あたたかいもの

少し暗い雲が広がる空からは白いふわふわの雪が降りてきて、並んで歩いている二人の傘に積っていく。つないだ手も始めは彼女の手の冷たさで冷えていたが、段々温まってきた。

「シンヤ君、手、あたたかいね」

「そうかな？」

「うん。わたし、冷え症だからすごく嬉しい」

「よかった」

「あつ、そうだ。ねえ、シンヤ君」

「なに？」

「この世で一番あたたかいものって知ってる？」

「ははっ、そうきたか。知ってるよ」

もちろんこの質問には意図がある。答えは暖房でも、ストーブでも、コタツでも、太陽などでもない。ここで彼女は自分のカバンから1冊の文庫本を取り出す。

「読んでるんだ、シンヤ君も」

「それはねもちろん、“人肌”でしょ」

「せいかりい！ この本の題名だもんね」

彼女が手に持っている本、それはこれから見る映画、「人肌」の原作である。そこにはこう書いてある、「この世で一番あたたかく恋しいもの、それは“人肌”である」と。

「うん。いいよね、この作品」

「いいよね。どのシーンが一番好き？」

「それはやっぱり最後のシーンでしょ、ホテルで二人が裸で抱き合っていて人肌のあたたかさを伝え合う」

「わたしも一緒！ ホントいいシーンだよ」

「うんうん」

「でもさ、映画だとどうなるのかな？ このシーン」

「そうだね。確かに一応R15指定だけど……」

「もしタオル巻いてたら幻滅だよね」

「さすがにそれはないんじゃないかな、部屋が薄暗かったり、アングルが微妙だったりするかもしれないけど」

「ちよつと心配だね、最後の一番大切なシーンだから」

「うん」

二人は心配だった、小説を読んだときにそのシーンで本当に感動したから。時として映画化されると心もとない、タオルで隠してあったり、部屋が暗かったり、アングルが微妙だったり。でもこの映画は幸いにもR15指定、だからこそ二人とも見たいと思うのだった。

しばらく歩くと二人は映画館に着いた。傘にはすっかり雪が降り積もり、重さを腕に感じる。傾けると“ドサツ”と音が鳴って雪が地面に落ちる。

「わあー、つもったねー」

「うん、結構降ってたもんな。それで、今何時？」

「えつとね、9時半過ぎだよ」

「もうそんな時間か。じゃあ、チケット買っちゃおうか」

「うん」

傘を閉じた二人、中に入ると上着を脱いでチケット売り場に歩いて行った。

34、体温の意味

34、あたたかさ 体温の意味

わたしは感じていた、強く抱きしめていた彼の腕からあたたかい体温を。人の体温は身体で糖分や脂肪が燃やされたことによるものだと言われている。ただわたしはそれだけだとは思ってない。例えば心の温度、熱さが体温に影響していることもあると思っている。彼の腕から伝わってくる体温は本当にあたたかかった。それはおそらくわたしのやわらかな胸の奥の鼓動と呼応したことによって生まれたのだろう。

そういえばこれから見る映画、「人肌」も身体のアたたかさがテーマになった作品だ、「この世で一番アたたかく恋しいもの、それは“人肌”である」と。

「あつたかい、コウタくんの身体」

「ははっ、どっちがあつたかい？」

「どっちがっつて、おにいちゃんど？」

「そう、おにいちゃんどね」

「それはコウタくんに決まってるじゃん、だって愛の強さが違うもん」

「愛の強さか。同じだな、僕と」

「同じ？」

「つまり愛はあるってことだろ、兄に対しても」

「うん。おにいちゃん、優しくてあつたかいもん」

「そうか。僕も同じ気持ちだよ、妹に対して」

「そうなんだ」

「でもさ、ならどうして僕らはつき合っているんだらうね」

「どうして？」

「だってさ、自分を愛してくれている存在が、いつもすぐそばにいるのにな」

「そっかー……。でも、なら……。足りなかつたからかもね」

「足りなかつた？」

「うん。ほら、だってお互いにつき合っている恋人がいるから」

「じゃあ、妹も感じ取つたのかもな」

「感じ取つた？ なにを？」

「わからない？ 今、二人で伝え合っているものことだよ」

「身体のあたたかさ……。かな。そういえば一緒に布団で寝たな、おにいちゃん」と

「僕もだよ。そのとき伝えた、抱きしめて精一杯あたたかさを妹に」

「わたしも感じたよ、おにいちゃんからいっぱい」

「そうか。でもあつたんだよね、罪悪感」

「うん。悪いなつて思った、本当は彼女に届けたかつた愛を奪つたよな気がして」

「妹もそうだつたのかもな。そして僕も」

「だから一緒に寝よう、そう言つたんだ、わたし」

「僕も同じだつた、一緒に寝たかつた、ミキと」

「ありがとう、コウタくん、そしてごめんね」

「うんうん、こちらこそ」

二人は改めて伝え合つた、お互いの気持ち。久しぶりに一緒に寝ることにした夜を思い出して。嬉しかった、あのときは欲が先行しておもむくままに抱き合つたから。

映画館までの道のり、二人は素直に気持ちを告白することで身体のあたたかさの本当の意味を分かり合えた気がした。

35、別れること

35、別れること

第1シアターの中、真ん中から少し左後ろの席、僕は彼女と並んでまだ暗いスクリーンを見つめている。時計の針は10時になるちよつと前、20分前に入場が許可されたばかりのせいはまだ4割ほどしか埋まっていない。

「妹さん、いそう?」

横にいる彼女が小さな声で呟いた。そう待ち合わせ場所こそは違うものの、四人は今同じ映画館にいる。見る映画も「人肌」で一緒、狙っている上映時間も9時にお互い待ち合わせしたということは、10時15分と同じはずである。ただ人気のあるこの映画は2つのシアターで同じ時間に上映されている。妹は第2シアターにいるのかもしれない、そしてサキの兄も。

「いない……かな」

「そう。じゃあ、隣にいるのかもね」

「うん」

それからしばらくまた黙っていた二人、10分前になって中の灯りがほとんど落とされ、予告編の映像が始まる。先ほどまで半分以上しか埋まっていなかった席も8割近くになってきた。

「見当たらないや」

「妹さん?」

「うん」

それでもまだ妹の姿は見えない。どうやら隣にいるか、見る時間を変えてしまったようだ。でもこれでよかったのかもしれない。今、真実が分かればとても映画を楽しめるような状況ではなくなってしまうから。

「“人肌”、楽しみだね」

「うん。どんな原作だったか、覚えてる？」

「もちろん。何度も読み返したから」

「すごいな。僕はまだ1回しか読んでないや」

「1回だけ？　じゃあ、最近読んだの？」

「うん。映画、公開初日の1週間前にやっと買ったから」

「遅いね。わたしは去年からもう読んでたよ」

「そうだったんだ。じゃあ、出たすぐのところに読んだんだね」

「うん。それから好きだった、ずっと好きだった、この作品が一番」

「そうか」

映画が始まる前、二人の会話はここで終わり、それぞれ「人肌」の内容を思い出し頭の中に巡らせる。

「人肌」、それは一度想う気持ちがすれ違い、つき合うことをやめた恋人二人の物語。別れたのはつき合い始めてから1年、太陽の光がサンサンと降り注ぐ暑い季節だった。さざ波だけが鳴り響く静かな海の砂浜で、夕暮れに主人公のユウト（悠斗）が別れを告げた。彼女のマキ（真希）もそれに納得して頷いた。

36、忘れていくこと

36、忘れていくこと

チケットを買った二人、シアターに入る前に売店を見て回る。上映時間は10時15分から、今時計の針はまだ9時半をちょっと過ぎたくらいで、30分以上の時間がある。ちなみに入場は少し早くて9時45分からできるようだ。

「何か買って入る？」

「うーん……どうしよう。ポップコーンはいいかな、まだお腹空いてないし」

「そうだな。じゃあ、何か飲み物でも買おうか？」

「うん」

「何がいい？」

「コーラ！」

「えっ!？」

ほしい飲み物を聞かれたときにとっさにコーラと答えたわたし、彼は横で少し驚いたような顔をしている。

「どうしたの？」

「いや……いいけど、ちょっと寒くない？」

「それはそうだけど……あたたかい飲み物はなさそうだよ」

「……ホントだ。まいったなー、冷たいものは飲みたくないのに」
外ではまだ雪が降り続けているこの寒い日に、冷たい飲み物は飲みたくない二人。わたしは見落としているメニューがないか、もう一度一通り目を走らせる。すると右の奥の柱に貼ってある「この冬新発売!! ちょっとホットなドリンク」などと書いてあるポスターが目に入った。

「ねえ、コウタくん、あれ見て！」

「ん? へえー、温めの飲み物なんてあるのか。それにしょっか」

「うん！」

「何がいい？ 買ってくるよ」

「じゃあ、Sサイズのホットコーヒー。ここで待ってるね」
「分かった」

彼は飲み物を買うに向かう。その間わたしはカバンから「人肌」の本を取り出し、物語を思い出す。

マキと別れてからユウトはしばらく悩みもなく、すがすがしい日々を過ごしていた。一方結果的に振られたことになったマキはさみしい日々、しかし友達の励ましもあってすぐに明るい毎日を取り戻した。そして3カ月後にはつき合っていたときのことなど、ほとんど二人とも回想しなくなっていた。

5分ほど経って彼が飲み物を持って戻ってきた。見たところ二つともSサイズでホットコーヒーのようだ。

「お待たせ。はい！」

「ありがとう」

渡された紙コップにストローをさして一口飲んでみる。

「あつ、おいしい！」

「ホントだ！ ちょうどいいね。ミルクと砂糖はどうする？」

「うーん……このままでもいいけど、入れようかな」

「はい」

「ありがとう」

わたしは受け取るとカップのふたを開け、ミルクと砂糖を入れた。

その後ちょうどアナウンスがあつてシアターへの入場が可能になる。

「行こうか」

「うん」

二人は紙コップを片手に手をつないで第2シアターに向かって行った。

37、後悔するとき

37、後悔するとき

ところが二人が別れてから4カ月、季節は寒い冬を迎える。クリスマスが近づいて街を行く人々も、寄り添いあう恋人同士が増えてきた。僕は初めて後悔した、マキと別れたことを、どうしてももっと肌を通してあたたかさを伝えてあげられなかったのだろうと。

それはマキも同じだった。会社帰り、一人寒く凍えながら歩いていると、つき合っていたときの彼の肌のあたたかさが急に恋しくなつた。

二人はおもむろに携帯を開いてみる、確認したのはアドレス帳。ペアドレスは別れたその日に外していたが、なぜかそこには彼、彼女のアドレスが残っていた。唯一の希望だった、嬉しさが心の底から込み上げてきて連絡せずにはいられなかった。

僕の目には満杯の涙がたまっていた、寒い冬、恋人と別れたことで、一番人肌のあたたかさが恋しくなくなるときに、さみしく一人凍えながら街を歩く二人を見て。

そしてその涙は次の瞬間、溢れだした、再会できて泣きながら抱き合う二人の姿を目の当たりにして。横に座っていた彼女も同じだった、口を押えて泣き声が出ないようにしながら、たくさんの涙を流していた。

映画が終わると僕はポケットからハンカチを取り出し、顔をつたった涙を拭いて立ち上がった。まだ感動のあまり立ち上がれないでいる彼女に声をかける。

「サキ、大丈夫？」

「えっ、あっ、ごめん。ちょっと待って」

彼女は上目づかいで一瞬戸惑ったような様子を見せたが、僕と同じ

ように涙を拭いてすぐに立ち上がった。

「すぐよかったね」

「そうだな。行こうか」

「うん」

二人は薄暗い中自分の席を振り向き、忘れ物がないか確認すると寄り添いあってシアターの外に出る。

「あれ？ まだこっちでは終わってないのかな？」

どちらのシアターも上映時間は10時15分からで同じ、しかしどうやら混雑を避けるためか、映画が始まった時間が中で5分ほど違ったようだ。

「ん？ そうみたいだね。どうする？ 待つてる？」

「うんうん、いいよ。まだ分かりたくないから」

「そうだな。じゃあ、昼ご飯でも食べに行こうか」

「うん！」

時計を見ると12時半を少し過ぎたところ、彼女が頷くと二人は同じ施設の中のレストランがいくつか並ぶエリアに向かって行った。

38、再会のとき

38、再会のとき

僕は急いで携帯を操作してメールを打った。4カ月振りに取ろうとした突然の連絡、普通なら多少は躊躇する気持ちがあるものかもしれない。でもなぜか迷いはなかった、“会いたい！ マキももし同じ気持ちなら、今すぐ返事をくれ！！”、中身はただそれだけ、“送信しました”、画面にその表示がされても後悔はしなかった。返信は送ったすぐあとだった、いや、正確に言えばそれは返信ではなく彼女からのメールだった。“ねえ、今すぐあなたに会いたい！” お願ひ！！”、中身は今僕が送った内容とほぼ同じ、なんと今まさに二人の気持ちは同じだった。

二人が再会に選んだ場所、それは僕が別れを告げる前日に誘ったホテルの前。あのときは拒まれた、彼女に。身体を求めたこと、単純にそのことをいやがったのだと思っていた。でもそうではなかった……、ここを再会の場所に選んだのは彼女だったのだから。

「あのときはごめん、マキ。俺、自分勝手だった」

「うんうん、そうじゃないの」

「ん？」

「わたしは確かにあのとき断った。でもそれはいやだったからじゃないの」

「えっ！ じゃあ……」

「無理矢理にでも連れ込んでほしかった。そしたらわたし、あなたに抱かれていたと思うの」

「マキ……」

「心のどこかに躊躇する気持ちがあった、だからわたしは逃げ出したんだと思う。でも身体はあなたを求めていたの。だから……ごめんなさい」

「そんな！」

僕は驚いた、彼女の本当の気持ち、衝撃の事実を知って。そして彼女は告げた。

「今なら心も素直になれる。お願い！ わたしを抱いて！！ あなたがあのとときと同じ気持ちなら」

すぐに僕は彼女の手をつかみ、ホテルに入って部屋を1つ取った。部屋に入って向かい合った二人、躊躇うことなく互いに衣服を脱ぎ、裸になると思いつ切り強く抱きしめ合った、全身であたたかさを伝えあつて。

感動のシーン、映画の中で二人が抱きしめ合ったとき、わたしの目からはたくさん涙が溢れていた。彼も同じ、泣き声は抑えていたが、涙は止められていなかった。

エンディングも終わり、シアターは少し灯りがついて周りが見えるようになる。席から人が立ち上がり、中にいる人は少なくなっていく。

「ミキ、僕らも行こうか」

「うん」

彼はわたしの肩を軽くたたくと、その声をかけてくれた。そうして二人は立ち上がり、シアターをあとにした。

39、こめられた想い

39、こめられた想い

いろいろなレストランが立ち並ぶ3階のフロア、僕らはその中でハンバーグ専門店に入った。ここは市街地に本店があるおいしい店で、二人のお気に入りだ。今日は土曜日の昼、入ってすぐお得なランチセットを注文した。

今二人は向かい合って席に座り、出された暖かいお茶を飲みながら、ランチが運ばれてくるのを待っている。

「映画、結構よかったな」

「うん。私も感動して泣いちゃった」

「ははっ、そうか」

「なに、ちよつと笑っちゃって。シンヤ君も涙流してたじゃん」

「なんだ、見られてたのか。ホントは泣くつもりなんてなかったんだけど、最後は我慢できなかったよ」

「ふふっ、やっぱり。でもホントよかったな、最後のシーン」

「だね。R15指定に期待して正解だったよ」

「でも大変だったみたいだよ。読んだ？ この本のここ」

彼女はそう言ってチケットを買うときに渡された、映画館の宣伝雑誌の「兄弟」の特集が載っているページを開いて指差した。

「えっ、あー、まだ開いてもないや。なんて書かれてるの？」

「気になる？ 自分で読んでみて」

「分かった。なにになに……」

よく見るとそこには“制作秘話「R15指定へのこだわり」”と書かれている。内容は次のようなものだった。

この作品は当初、映画化されるにあたって全年齢対象にされる予定だったらしい。ところが監督が制作するにあたって強く押したように、R15指定の作品として撮ることを。しかしそれでもかなりもめたみたいだ、なにしろ最後の裸で抱き合うシーンを正面から光の

入った形で全身を映すためだけにR15指定にするのだから。もちろん俳優さん、女優さんが引き受けてくれるかという問題もあった。結局最終的には監督が直接主演の二人を説得し、半ば強引に押し切ったようだ。

でもそのおかげで非常に質の高い作品に仕上がりと、評判もよく、現在大ヒットしている。結果的にはR15指定にして正解だったというわけだ。

「へえー、なるほどね。これは監督さんに感謝、感謝だな」

「うん。ホントすごいよね。5分もないシーンのためだけにここまでこだわるなんて」

「そうだな。でも逆に言えばそれだけ監督の人も重要なシーンだと感じてたってことだな」

「そうだね。よかった、読者と同じ感想を持っている人が監督で」

「うん」

監督の強い想いによって実現したこの作品、二人は料理を待つ間、大いに賞賛の言葉を口にした。

40、会いたくないから……

40、会いたくないから……

わたしの向かいには大好きな彼の笑顔、そして目の前のテーブルの上にはこれまた大好きなチョコレートパフェが置かれている。これを注文したのはついさつき、昼ご飯のスパゲティを食べたあとだ。映画を見終わったあと、3階のレストランフロアに向かった二人は、そのなかのスパゲティ屋さんに入った。彼はスパゲティにサラダとスープ、パンがついたランチセットを注文した。しかしわたしは単品でスパゲティだけを頼み、食べ終わったあとチョコレートパフェを注文した。つまり大好きなデザートのためにお腹のスペースを空けておいたというわけだ。

「おいしそう、いただきます！」

スプーンを持ちさっそく一番上のチョコレートシロップがかかったバニラアイスクリームを生クリームと一緒にほお張る。

「おいしい！」

「好きだな、ミキはチョコレートパフェ」

「食べる？ コウタくんも？」

「いや、いいよ。もうお腹いっぱいだから」

そうは言っているが、目の前でわたしがこんなにおいしそうに食べているのに、ほしくならないはずがない。その証拠に目線がパフェと口の間を往復しているスプーンを追いかけているし、つばも溜まってきたりするのか、何度も“ゴクンツ”と飲み込む音が聞こえてくる。

気持ちを察してわたしはスプーンですくった一口を彼の口に持って行ってあげる。

「はい！」

「えっ、いいの？」

「食べてみて、コウタくんも」

「わかった」

目線を落として口を開けている彼、その中にスプーンの先を入れると、口を閉じて舌をつかい舐めとってくれた。

「どう?」

「あつ、おいしいね、これ」

「でしょ。これ今までで一番のかも。バニラアイスは濃厚だし、このチョコレートシロップもちっとビターが効いていて甘さもちよ
うどいいし、生クリームもふわっつとしてもうサイコー!」
あまりのおいしさに食べるスピードがどんどん速くなり、あつとい
う間になくなってしまった。

すると同時にタイミングよく、食後のホットコーヒーが運ばれてき
た。一口含んで甘さが残っていた中をスッキリさせる。

「どうする? これから?」

「うん、どうしよつか。あつ、そういえば結局会わなかったね」

「ああ、二人にか。確かにそうだな。まあ、どこかにいるんだろう
けど」

「うん、たぶん。でももしかして、神様が会さないようにしてるの
かな?」

「そうかもな。今は誰もまだ分かりたくないだろうから」

「どうか会いませんように」

きつと神様が4人を見守ってくれている、そう感じたわたしは手を
合わせてお願いした。

「ははっ、手を合わせてお願いか。……あつ、そうだ! ちょっと
行きたいところがあるんだけど、いいかな?」

「いいよ。どこ?」

「それは行ってからだよ。楽しみにしてて」

「わかった」

彼はお店を出たらどこにわたしを連れて行ってくれるのだろう。少
し腕をめぐって確認した時計の針はもう2時を少し回っていた。

41、最後の終わり

41、最後の終わり

今日僕は彼女にプロポーズする、今まで一緒に生活してきた妹との生活を終わりにして、サキと幸せになるために。こういう何かを終わりにして、新しいことを始めようとするとき、人はその前に始めたことの最初のきっかけに立ちかえりたくなるという。

二人の始まりの場所、それは何も告白の瞬間とは限らない。例えば初デート、初キス、初めて抱き合ったとき、初めてのセックスなどいろいろある。ちなみに僕ら四人は、一度も2泊以上の旅行に行つたことがない。しかも車を持っていないため、どこも電車、バスなどの公共機関を使えば行けるところばかりだった。

料理が来てからもしばらく二人は映画の話題に花を咲かせていた。そんな食後のコーヒーが運ばれてきたところで、ふと彼女が時間を聞いてきた。

「ねえ、今何時？」

「コーヒーを置き、左手を振って腕時計を確認する。」

「えっとね、1時57分だよ」

「えっ、もうそんな時間！」

「まあ、結構ゆっくり食べてたからね」

「そっかー。これからどうしようか？」

「そうだね。どっか行きたいところある？」

「うーん……すいぞくか……」

「えっ!？」

確か水族館は2年近く前、二人が初デートに選んだ場所だ。さつきまで乗っていた電車を終点まで行ったところにある。ここからバスで駅まで戻って10分、そこからさらに1時間20分はかかる。つまり時間的にかなり厳しい。

「あつ、でも遠いよね、ちよつと」

「うん。着いたときには、もう4時過ぎちゃっよ」

「だよー。じゃあ……海水浴場とかどう？」

「かいすいよくじょう?? この寒いのに」

「あれ? 覚えてないの? シンヤ君」

なんと彼女が提案してきた場所は意外にも海水浴場。一応海水浴場はここからバスで15分もかからず、時間的に全く問題ない。しかし今日はこの冬一番の寒さ、最初ははつきり言って訳が分からなかった。でも今日は僕が彼女にプロポーズする大事な日でもある、それだけに何かあるのだろう、彼女がここに行きたくなる理由が。

「ちよつと待つてね」

コーヒーを少し口に含み、目をつぶって考えてみる。するとちょうど1年半前、秋になりかけのころ、ぎりぎりの時期に行った海水浴を思い出した。

聞こえてくるのはさざ波の音、水着だけだと少し肌寒い、夕暮れどきの時間だった。海に向かって並んで砂浜に立っていた二人、僕はそつと彼女の肩を抱いて……、

「あつ、思い出した！」

「ホント? 言ってみて」

「初めて、キスした場所だよね」

「そう、正解! どうかな？」

「いいね。そうしようか」

「うん」

これから二人は結婚する、その大切なとき、最後の終わりに選んだ場所は思い出の海水浴場だった。

42、二人だけのもの

42、二人だけのもの

市街地の中心部、並んで立った二人が見上げる先には、この街で一番高い建物がある。どうやらここが、彼がさつき行きたいと言っていたところのようだ。

ちなみにここまでは映画館から歩いて10分もかからない。当然その高さから周りにたくさん高いオフィスビルがあるにもかかわらず非常に目立ち、映画館を出て歩き始めてからすぐ、どこに向かっているのか気づいていた。そしてその理由も……。

「ここだよ、ミキ。覚えてる？」

「もちろん、覚えてるよ。初デートで最初に行った場所だよ。西南中央タワー」

この上の展望台、彼が初デートで最初にわたしを連れて行ってくれた場所だ。あれから今まで結局行ったのはその一度切り、でも上空からの街を一望できる景色はとても印象的で、記憶に鮮明に留めていた。

「そう。行こうか、展望台」

「うん」

二人は見上げていた首を戻し踏み出すと、正面の自動ドアから中に入る。展望台へと直通でいけるエレベーターは少し奥に入ったところにある。

「なか、変わってないなあー、前に来たときと」

「そうだね」

彼の言ったとおり何も変わっていない、右手前にあるタワーグッズのお店、左手前のレストラン、右奥の券売機、左奥のサービスカウンター、正面奥には2台のエレベーターがある。左は20階まで通常フロアに停まるもので、右が50階の展望台まで一直線だ。

「はい、入場券」

「ありがとう」

彼がわたしの分まで買って来て、券を1枚渡してくれた。値段は大人一人400円と少し高いせか、他に客もなく、すぐに乗り込むことができた。

二人を乗せたエレベーター、50階上空までの直通便は150メートル先まで一気に昇っていく。後ろ向いて窓から見下ろす景色、見える範囲はますます広く、小さくなっていく。

「わあー、すごい」

「どんどん小さくなっていくな、街が」

「うん。久しぶりだね、懐かしい」

「そうだな、二人の思い出の場所」

「大事な初デートの……、うん」

わたしはそっと頷いてつぶやく。

しばらくして50階に着いてドアが開く、一歩踏み出した先には誰一人もいない。

この四方見渡す限り一望できる市街地の絶景は、今まさにここに立っている二人だけのものだった。

43、初めてのキス

43、初めてのキス

バスを降りて目の前に広がった光景、砂浜一面を薄っすらときれいに白い雪が覆っていた。ここに来るまでに朝から降り続いていた雪もやみ、雲の間からは太陽がのぞいている。その光は白い氷の粒に反射してまるでダイヤモンドのように輝いていた。

「わあー、きれいー」

「すごいな、これは」

この街は海に近く比較的温暖なため、雪が積もることは非常に少ない。まして海岸の砂浜の上、まず見たことのある人は非常に少ないだろう。僕らは幸運だった、何年に一度あるかないかの積もるほどの雪、雲の間から差し込む太陽の光、さらにここが二人の初めてキスをした場所であったこと。故に偶然巡り会えた、最高の景色に。

「行こう！」

「うん」

二人は手をつなぎ一歩踏み出すと、雪の上を歩いていく。ここは海水浴シーズンなら海の家があつて、人の数も多い。ところが今は真冬、それにこんな天気だ、見渡しても誰一人いない。

「誰も……いないね」

「……そうだな」

しばらく歩くと波打ち際にたどり着いた。後ろを見ると僕らが歩いて残した足跡、すぐ前は波が届いている境目で雪がなくなってきた。いる。

見つめていた、二人はずっと、ずっと……いつまでも黙って、たださざ波の音に耳を澄ませて。

20分ほど経つただろうか、急に足元のほうに冷たさを感じる。下を見るとついさっきまでは20センチほど先だった波が、足にかか

つてきていた。

「きゃあっ！ つめたい！」

彼女も気がついて、少し大きく一步後ろに下がる。

「潮が満ちてきたのかな」

「……ねえ、シンヤ君」

ここで初めて彼女が僕のことを呼んだ。少し後ろを振り向いて視線を合わせる。

「ん？」

「なんでここに来たのか忘れてない？」

「えっ、あっ、そうだったな」

別に忘れていたわけではない、あまりにもきれいな白い雪と太陽の光と波が織り成す絶景に、ちょっと目を奪われていただけ。それはおそらく彼女も同じ、ついさっきまで僕と同じように見つめていたのだから。

でも、そう、もちろん本当の目的は……。

僕も後ろに一步下がって、彼女と同じ波からの距離で向き合う。

「シンヤ君」

彼女は僕の名前を呼んで、そっと目をつぶる。

「サキ」

僕も名前を呼ぶ、そしてその肩に手を置いてゆっくりと唇を近づけた。

44、二人だけの景色

44、二人だけの景色

エレベーターから一步踏み出して降り立った八角形のフロア、目の前には誰もいない。

「誰もいないね」

「うん、後ろは……」

わたしがエレベーターの後ろ側に回って確認する。

「こつちもないよ」

「じゃあ、本当に……」

「二人きりだね」

「うん」

状況をはつきりと飲み込むためだろうか、彼は少し大きく頷いた。前に来たときも客が少なかったとはいえ、それでも何組かの家族連れやカップルで10人ぐらいいいた気がする。確かに人気がない場所ではある、しかしここは市街地の中心部、しかも今は土曜日の午後3時前、まさかこんな場所で、こんな時間に二人だけになれるとは思ってもみなかった。

さっそく正面の窓に並んで立ち、街全体を見渡してみる。方角で言えば北のほうになる。待ち合わせをした駅近くの公園が見え、電車は東西の方向に走っている。横を見て彼の視線を確認すると、ちょうど東から走ってきた電車を追っている。するとわたしは今まで意外にあまり知らなかったことが気になった。

「ねえ、コウタくんの家って、どっち？」

そう、それぞれ兄妹のこともあって家に行ったことがなかったせいとか、お互いに住んでいるのがどこかほとんど知らなかった。

「あれ？ あっ、そっかー、まだ話したことなかったけ？」

「うん。わたしも言ったことなかったけどね」

「まあ、行く機会がなかったもんな。えっとね、ちょうど今電車が過ぎていった西側だよ」

彼はそう言っただけで少し西方向に目をやり、線路の先の遠くを指差した。

「あつ、やっぱり方向は一緒だね」

「だな。いつも乗る電車は違うけど、途中までは同じ駅に停まるから」

「そうだね。ここから家は見える？」

「うーん……遠すぎてちよつと無理かな」

「わたしも。電車で1時間って遠いよね」

「うん。あつ、でも本当に今日はお邪魔していいの？」

「もちろん！泊まってたってね」

「えつ、服持ってきてないけど」

「大丈夫だよ、おにいちゃんがあるから。それにちゃんと……」

「ん？」

「妹さんに会えるんだよ」

「ははつ、予想通りならね」

「そうに決まってるよ、わたし、もう確信してるもん」

「そうか。まあ、ほぼ間違いないだろうな、あれだけ偶然が重なれば」

「でしょ。ここ出たら行こうね」

「そうだな。でも、その前に……」

「なに？」

相変わらずエレベーターは下に戻らず、誰一人昇ってこない。そんな中、彼はわたしのほうに身体を向けて、外を見つめていた視線を、わたしの目に合わせた。

45、よみがえる記憶

45、よみがえる記憶

触れ合った唇、瞬間、二人にはあのときの記憶がよみがえった。つき合い始めてまだ半年も経っていない、手をつなぐときでさえも恥ずかしくて顔を赤くしていた。8月の終わり、秋になる直前に行った海水浴、誘ったのは僕だった。始めはあきらめ半分だった、まさか彼女が僕の前に水着姿になってくれるなんて思わなかったから。それは大きな賭けでもあった、妹のこともあって何かと躊躇し気味だった彼女との関係。きっかけにしたかった、もつと深い恋人関係になるための。お互いに見せられる限界まで肌を露出する海水浴、そんなときにはピツタリだと思った。

勇気を出して打ったメールの文面、ドキドキしていた、最悪の場合には怒られるかもしれない。しかし意外にもすぐにオツケーの返信がきた。もしかしたら望んでいたのかもしれない、彼女も僕ももつと親密になりたいと。

今思うと僕と同じ気持ちだったのだろう、彼女も僕が妹を愛しているように兄を愛していたみたいだから。でもだからこそどこかで変えないといけないと、恋人を兄妹以上に愛せる存在にするために。そしてそのデートあと、感じていた恥ずかしさは消え、躊躇する気持ちは薄れ、次のときにはもうホテルでお互いを強く求め合っていた。

夕暮れどき、ほとんど誰もいない少し肌寒い海岸で、向き合った二人、僕は彼女の肩に手を置いて唇を触れさせた。同じだった、時間帯と季節以外は。

思い出した、舌を絡ませたりはしない、触れ合うだけのキス。ただ長かった、いつまでも、いつまでも続いて、本当にときが止まったような気になるくらい。

最初は目を閉じていた彼女、なぜか途中で少しだけ開けて笑った。気づいたのだろう、僕があのとときのことを思い出して、舌を絡ませたりはしないようにしている。

それからどれくらい時間が経ったのだろう、正確には分からない。名残惜しむように唇を離れたとき、彼女は満面の笑顔で言ってくれた。

「ありがとう。ちゃんと覚えてくれてたんだね」

「もちろん。大切な思い出だから」

「うん」

はつきりと頷いた彼女、それから腕時計に目をやり、時間を確認している。

「もうすぐ3時半か、どうする？」

「あんまり遅くなるといけないし、もう、行こうか」

「そうだね」

二人はまた少し潮が満ちてきた海に、振り返って背を向ける。手をつなぐと雪の上をゆっくりとバス停まで歩いて行った。

46、気持ちの沸騰点

46、気持ちの沸騰点

わたしは外を見るのをやめ、向き直った彼の目に視線を集中させる。彼が何を望んでいるか、何を訴えているか、何を求めているのか、答えはすでにわかっている。

キスだ、二人の最高の愛に満ち溢れた。でもすぐにはしない、ずっと、ずっと見つめ合い、できるだけ我慢して、気持ちが昂りきるのを待つ。

その間、わたしの頭の中には初デートの思い出が蘇える。前に来たのは今から一年半以上、一昨年6月の最初の日曜日だった。梅雨に入る直前、天気は空に多少雲があつたものの晴れていて、ここからきれいな景色が見えたのをよく覚えている。

あのときはまだつき合い始めてまだ2か月も経っていなかった。でも彼はわたしにとってとても温かな存在だった。手をつないで並んで話しながら街を歩く、それだけですごく楽しかった、兄とデートできているような気分になれて。その理由は今思うと、彼がわたしの兄と同じように妹を愛していたからだろう。

そしてこの「西南中央タワー」の展望台に来た、そのときは10人くらい他にも客がいた。10分ほど話しながら景色を眺めて、そのあと、今と同じように彼と見つめ合った。ただキスはしなかった、まだ恥ずかしくて、それに“兄に悪いな”って思う気持ちがあつたからかもしれない。

しかし今は違う、わたしは知っている、兄にも愛している彼女の存在があることを。だからためらうことなんてしなくていい、わたしは誰よりも彼を愛していて、その想いを伝えるためにキスをする。

「ミキ」

「コウタくん」

二人は同じタイミングで名前を呼び合う、同じだった、寸分の狂いもなく。気持ちの昂りの温度は沸騰点を迎え、引き寄せられる磁石のように唇を合わせた。

木曜日の夜、ホテルのベッドの横でした、お互いに貪り合うような激しいキスではない。舌も出さず唇を合わせるだけ。それだけで十分だった、想いを伝えあうには、心の温かさを届けるには。

10分経つただろうか、“チーンッ！”と音が鳴ってエレベーターが誰かを運んできたようだ。瞬間、彼が少し笑うと、唇が離れていく。もつと長くしていたかった、それを目で訴えかけたが彼はエレベーターのほうに視線をそらす。

するとそこには小さな子供を二人連れた家族が立っていた。

「あつ、ごめん」

「いいよ。じゃあ、そろそろ行こうか」

「うん」

納得したわたしは、彼と再び手をつなぎ直し、エレベーターに乗って下まで降りて行った。

47、研ぎ澄ませた感覚

47、研ぎ澄ませた感覚

海水浴場前のバス停から駅までは25分、乗り込んだ電車は4時10分発でこの分だと向こうに着くのは5時過ぎになりそうだ。

ちなみに彼女がいつも利用している電車は東南線で、今乗っている東西線とは別に走っている。ただ途中二つの路線が一緒になる区間があり、4時20分過ぎのついさつき最後の駅を通過したところだ。つまりこれから窓の外に見える景色は、彼女にとって見慣れないものになる。

「ねえ、見て！ シンヤ君、海がきれいだよ」

「うん。こつちだとずっと見えるよ」

「そうなんだ、いいな」

「東南線からは何か見えないの？」

「見えないよ、だってさっきの駅過ぎたらほとんど住宅街だもん」

「そうか、じゃあ、こつちのほうがいい？」

「うん」

やはり彼女にはこつちの景色のほうがよく見えているようだ。そう、これが二つの路線の大きな違いで、東西線は海沿いを通っていて、そのきれいな海をほぼ最後まで眺めることができる。一方東南線は市街地を抜けた後は、東西線に別れを告げて住宅街に入っていく。

実は僕もここに就職が決まって下見に来たとき、どつちの沿線に住むか迷ったのをよく覚えている。そこで最後の決め手になったのは電車から見えた景色の違いだった。確かあのとき乗ったのは夕方6時前、夕焼けで空が赤く染まり、水平線に沈んでいた真っ赤な夕日を強く印象に残っている。

「なら、こつちに住むか」

「えっ」

「結婚したら」

「うん。四人で一緒にね」

「そうだな」

ここで一度会話は途切れ、彼女は窓から見える海の姿に釘付けになっている。

そういえば妹はどうしているだろう。途中、先に電車を降りたところまでは一緒だった。それから映画を同じ時間に見て、3階のフロアで昼ご飯を済ませたのはおそらく間違いない。問題はその後、僕らと同じようにどこか思い出の場所に行ったのか、それとももう家に帰りついているのか。

でも予感があった、なんとなくだが、四人は今同じ電車に乗り合わせている。もちろん顔は合わせていないので、ホームに出てきた夕イミングも、乗っている車両も当然別のはずだ。

なら少し目を閉じて、胸に手を置いて感覚を研ぎ澄ませてみた。妹の想いをシンクロできるような気がして。

48、聞こえた心の声

48、聞こえた心の声

今わたしは彼と一緒に電車に乗って並んで座っている。駅に着いたのは4時少し前、1本前の電車は3時57分に行ったばかりなので、ホームにいた人の数はまだまばらだった。いつも帰宅するときに乗る車両は前のほう、そのほうが駅に着いたとき階段に近いからだ。

でも今日乗っているのは8両編成の7両目、後ろのほうだった。ホームに出て兄がいるか確認したわたし、いないのがわかるとすぐに立ち止まった彼の腕を少し引っばって、“もっと後ろからしよう” って言った、まだ会いたくないから……。

ちゃんと会わないですんだ、ホームでは。だけど感じた、電車に運ばれて後ろに飛んでいくきれいな海の眺めているとき、兄がいるのを。だから目をそっと閉じて、感覚を研ぎ澄ませてみた。

「おにいちゃん、わたしはここにいますよ」
問いかけてみる、心の中から。

「……わかるよ、ミキ」
すると聞こえた、かすかに兄の心の声。瞬間はっとして、思わず目を開き瞬きしてみる。

「どうしたの？ ミキ」

「今、聞こえたの」

「えっ？」

「おにいちゃんの声が、かすかに」

「そうか。ってことは同じ電車に乗ってるのか」

「たぶん……」

「なら僕も目を閉じてみるか」

今度は彼の番だ。さっきのわたしと同じように少し頭を傾げ、目を

ゆっくりと閉じる。

見つめていた、感覚を研ぎ澄ませて妹の想いを感じ取るうとして
いる彼の姿を。2分ほど経っただろうか、かすかに笑みを浮かべて彼
が目を開いた。

「どうだった？」

「ん？ わかるだろ、ずっと今顔見てたんだから」

「もうっ、いじわる。でも聞こえたんでしょ」

「ああ、もちろん。もうこれで間違いないな、確信したよ」

「楽しみだね、駅を降りるときが」

「そうだな」

二人が兄妹の心の声を聞いたとき、予想は真相に変わり、予感
は確信へと変わった。もう兄の恋人が、彼の妹であることは間違
いない。

恋人同士、兄妹同士、四人の心は完全にシンクロしている。相手
の姿は見えない、同じところにいるかどうかもさだかではない。でも
目を閉じて、感覚を研ぎ澄ませればわかる。自分の心臓の鼓動と、
かすかに届いてきた想いが反応して、そして心の声が聞こえる。
まさに四人の想いがシンクロして、つながった瞬間だった。

49、四人が会う場所

49、四人が会う場所

駅に着いたのは5時8分、さつき四人で心の声のやり取りができたことから考えて、妹が、彼女の兄が同じ電車に乗り合わせていることは間違いない。僕ら二人が乗っていたのは階段がすぐ先にある2両目、そこから考えると中で会わなかったということは、妹は後ろのほうにいるはずだ。

降りてみずぐには階段へ向かわず立ち止まってみる。しかし横で彼女が袖を引っぱってきた。

「ん？」

「ねえ、行こう」

「えっ!？」

てつきりここで二人を待つことになると思っていたのだが、意外にも彼女は僕に歩くように促した。

「待ってなくていいの？」

「うん。だってここは……あまり……」

そう言いながら彼女は周りを見渡した。どうやら駅にたくさん人がいるのを気にしているようだ。確かにここだと仮に会えたとしても、あまり落ち着いて話すことができない。

「それもそうか。行くか」

「うん」

僕もその理由に納得して、二人で手をつなぎ階段を上がっていく。

「なんかドキドキするね」

「そうだな。分かっていることはいえ、四人で会うのは初めてだもんな」

「うん」

「でもどこで待つの？ 二人を」

「うーん、同じ電車だったから、たぶん、今後ろから来てるんだよ

ね

「おそらくそうだけど……、駅を出たところでどう?」

「悪くないけど、人多くない?」

「そうか……」

二人を待つておく場所を考えながら、このタイミングで改札口をくぐる。すると目の前に駅の外の開けた視界が入ってきた。そのとき僕の頭にちょうどいい場所が浮ぶ。

「そうだ。駅を出てちよつと行ったら人通りの少ない脇道に入るから、そこでどう?」

「いいよ、そこで」

「じゃあ、見つからないうちに少し走るよ」

「うん」

彼女が頷いて駅を出ると、腕をつかんで軽く走り、100メートルちよつと行つて交差点の手前の脇道に入る。さらに50メートルほど行つて通りの人の声が聞こえにくくなったところで立ち止まった。

「はあつ、ここでいいかな?」

「はあつ、はあつ、ちよつと速いよ、シンヤ君」

「ごめん、ごめん。で、どう?」

「ぶつっ……。いいね。ちゃんと誰もいないみたいだし……。あつ

！」

「えっ!?!」

二人は立ち止まり息を整えて、周りに誰もいないことを確認しようとしたそのとき、運命の瞬間が四人に訪れた。

50、運命の瞬間

50、運命の瞬間

「起きて！ ミキ！ 起きて！」

「ん？」

「もうすぐ着くよ！ 起きて！」

「ふあゝあゝあつ」

自分でも気づかないうちに眠ってしまったわたし、駅に着く直前、彼に起こされて目を覚ます。

「起きた？」

「うん」

まだ視界がぼやけている中で聞こえる彼の声、ロボットのよう機械的に反応して頷いた。

“ にしまちゝ、にしまちゝ、降り口は右側です”

そのときちょうど車内アナウンスが流れ、電車がゆっくりと減速して駅のホームに停車する。ドアが開くと彼に手をつながれて立ち上がり外に出る。

「おにいちゃん、いるかな？」

わたしの兄と彼の妹、さつき電車の中で心の声が聞こえたのは紛れもない事実、となると今一緒にホームにいるのは間違いない。ここは階段から遠い7両目のそば、背伸びをして前を見してみる。

「見えた？」

「うーん……………、あつ！」

「どうしたの？ いたの？」

「たぶん……………、コウタ君には見える？」

彼の身長は180センチ近く、163センチのわたしより15センチ以上は高く、背伸びをすればもっと正確に確認できる。

「えっとね……………、あつ、いた！」

「ホント！？ じゃあ、早く行かないと」

わたしはそう言って彼の腕をつかみ走り出そうとする。

「待って！」

しかし足を踏ん張られ、引き止められてしまう。

「えっ！？ どうして？」

「ここで会っても周りに人が多すぎるよ」

「それもそっか」

確かに彼の言うとおりだ。ここで会っても周りに人が多すぎて、落ち着いて話すことができない。

「歩いて行こうか」

「うん」

二人は改めて手をつなぎ直し、彼に見えているだろう二人を追いかけて歩き始める。

途中、一歩一歩進むごとに早くなっていく心臓の鼓動、緊張感が高まっていき話す余裕もない。今思うと今日は同じ映画館にいたはずの四人、でもなぜか会わなかった、見た映画も同じだったのに。それからおそらく昼ご飯も同じ3階のフロア、しかしここでも会わなかった。最後にはわたしが行くとき兄と別れた場所、同じ駅から同じ時間に出発する電車に乗り込んだ。それでも同じ車両には乗り合わせなかった、心の声は確かに聞こえたけれど。

階段を下りて改札口を通り抜け、いよいよ目の前に見慣れた駅の外へ視界が開ける。思えば今日の朝、兄とここで思い切り抱きしめ合った、それぞれの本当の想いを告白して。そして今隣にいる彼こそ、わたしが選んだ、を選んでくれた、一番わたしのことを大切に想ってくれる人。

「走った、ミキ！ 急ごう！」

「うん」

二人は走り出した、兄と妹を追いかけて。100メートルちよつと行って交差点の手前の曲がり角を右に入ったとき、四人に運命の瞬間がやってきた。

5 1、四人の認識（前書き）

ここまで読んでくれたみなさん、大変お待たせいたしました。
やっと四人を会わせる場面にたどり着けました。

ここから物語はクライマックスへ向かいます。
引き続きよろしくお願ひします。

5 1、四人の認識

5 1、四人の認識

遂に四人は出会った、駅を出て通りから脇道に入ったすぐのところで。妹の横にいる彼が誰なのか、もう何時間も前から分かっていた。それは僕が一番大切に想っている彼女の兄、コウタさんであることを。

二人の顔をそれぞれ見つめ合って、目を合わせて、ゆっくりと歩み寄り近づいていく。分かっていたこととはいえ、少し驚きはあった。初めて恋人がいると知ったときちょっとショックだった、僕も妹も、おそらく彼女とその兄も、自分が愛している以上に、愛する人、愛してくれる人が隣にいることの実実を突き付けられたから。

しかし真相はもつと嬉しくて、希望に満ち溢れたものだった。四人が向かい合い立ち止まったとき、彼女は確かめるように笑顔で言った。

「おにいちゃん」

「サキ」

僕は最高に嬉しかった、ほんの少しだけ残っていた不安が全て消えて。当然妹もそれは同じ気持ち、抑えきれなくなって二人は……。妹が小さな声で言った。

「せえーの……」

「うん」

頷いて二人は両手を上げて叫んだ。

「やったー!!」

「やったー!!」

本当は会おうと思えばもつと早く会うこともできた。でも四人には分かっていて、いくら嬉しいことでも受け入れる心の準備が必要で、今がその出会うべき時で、そして最も喜ぶことができる瞬間であることを。

僕らが両手を上げて喜んだあと、四人は改めて恋人同士並んで向き合った。少し気持ちを落ち着かせて僕は言う。

「じゃあ、どうしよっか？」

「まずは自己紹介からじゃない？ シンヤ君」

「そうだな。では僕から……」

「待った！ それなら並びなおそう」

「えっ！？ コウタくん、どうして？」

「ほら、そのほうがしやすいだろ」

「そっかー」

「それもそっか。ミキ、こっち来て」

「うん」

「サキもほら、こっちに」

「うん」

僕の呼びかけに頷いて妹はこっちに、彼女は兄の呼びかけに応じてそっちに移る。

「じゃあ、改めて僕から。兄の中藤進矢です。よろしく。で、こっ

ちが妹の」

「中藤美希です。よろしくお願いします」

僕は少し手を挙げて、妹は小さくお辞儀をした。今度はそっちの番だ。

「よろしく。僕からでいいよね」

「うん！」

「僕が兄の佐藤幸太です。で、こっちが妹の」

「佐藤沙希です。よろしくお願いします」

こうして四人は互いに、改めて兄妹であることを示し、認識した。

52、素直になること

52、素直になること

今朝以来だ、自己紹介のためとはいえこうやって兄とわたしとが並んで立つのは。それも兄の彼女であるサキを差し置いて、寄り添うように立っている。これはこのチャンスを逃すわけにはいかない。わたしは向かい合っていた視線をそらし、右側に立っている兄をのぞき込むように見上げる。

「どうした？ ミキ、ん？」

兄はわたしと目が合うと少し頭をかしげ、疑問の言葉を投げかける。ここはいつものように何か言って返したりはしない。そう、すきを見せず背伸びをしたわたしは兄のほっぺたに……、

「おにいちゃん、ちゅっ」

そっとキスをした。瞬間兄は顔を少し赤くして、黙ってわたしのことを見つめる。向かいにいるお兄さんは別にいやがるようなそぶりは見せず、無表情になる。一方サキさんはほっぺたを少し膨らませて怒ったような表情をしている。

(やった！)

してやったりだ。でもすぐに予想していたとおりのことをサキさんはしようとする。背伸びをしてお兄さんのほっぺたに唇を……、

「やめる、サキ」

しかしなんと意外にもそれをお兄さんは拒否したのだ。

「えっ、どうして？ だって……」

「だってじゃない、サキにはちゃんとキスしてあげるべき相手がいるだろ。さあ、あっちに行った、行った」

わたしの兄と違って厳しい大人な対応だった。それを見てわたしの心の中には急に後ろめたさが芽生えてきた、なんだかとても悪いことをした気がして。

「でも……」

サキさんはすぐにはこっちは行くとはせず、引き下がろうとする。

「いいんじゃないですか？ 別に。させてあげましょうよ、キスぐらい」

すると今度は兄がさらに意外なことを口にした。そしてわたしに唇を近づけてくると……、

「ミキ、ありがと。ちゅっ」

「おにいちゃん……」

ほっぺたにキスを返してくれたのだ。

「ちよっ、ちよっ……」

嬉しかった、本当に嬉しかった。けれども当然だがサキのお兄さんは思わぬ行動に動揺している。しかし今度は兄が諭すように言ってくれた。

「ホントの気持ちをお願いします。僕たち兄妹はとても仲がよくて、だからミキが僕にキスした

同時にサキもしたくなる、自然なことですよ。素直になりました。兄の対応は心がこもっていても優しくかった。でもこのほうがいいのかもしれない。これからわたしたち四人はおそらく一緒に生活することになる。となるとこういう場面は度々出くわすことになるだろう。そのとき気持ちを抑え込もうとするのではなく、素直になつて思つたままに行動に移す。そうすれば想いを溜めこむことなく自分の愛をまっすぐに相手に届けることができる。

兄の話聞いてしばらくお兄さんは考え込むと、納得したのか頷いてこう言ってくれた。

「それも……そうですね。それじゃ僕もかまわずに、ちゅっ。ごめん、サキ」

「うんうん、ありがと。おにいちゃん、ちゅっ」

二人の表情も笑顔に戻り、ほっぺたへのキスを交わし合った。

自分の気持ちに素直になって、相手の気持ちを優しく受け止めてあげる。わたしは一連の行動を通して、小さなことだけれども大切なことを学ぶことができた。

53、嫉妬心の対処

53、嫉妬心の対処

自己紹介のあとすきを見せたせいで、妹からされたほっぺたへのキス。一瞬胸が熱くなつてドキツとしたが、なんとか上手く対処することができた。少し曇った四人の表情も今は笑顔に戻っている。さっきの一連の出来事は小さなことだが、とても大切なことでこれからの四人一緒の生活に直結する。仲のいい兄妹同士が結婚して一緒に生活を送る、そこには愛する人、夫、妻、大好きな人、兄、妹と同時にそばにいられるというメリットと、愛情表現するときお互いに嫉妬心が生まれるというデメリットが存在する。その対処法として彼女の兄は抑えること、僕は素直になることの2つの提案がされた。しかしより良い関係をより長く、できることなら永遠に続けていくためには、後者のほうが適当だろう。そしてそれがお互いにストレスを溜めず、温かい家庭を作ることにつながっていくと考えられた。

四人が会ってからしばらく経って、自己紹介とかをしているうちに、時計の針を確認するともう5時20分を少し回っている。

「あの、じゃあ……、そろそろもとに戻ったほうが……、いいよね、ミキ」

そこで僕はまずこの兄妹同士に並んでいるのを、もとに戻るように妹に促す。

「うん」

「そうだな。サキも、いい？」

「わかった」

二人の妹はとも兄の問いかけに頷き、入れ替わって妹が彼女の兄の横に、彼女が僕の横に戻ってくる。

「ねえ、これからどうするの？」

その後、彼女がみんなに問いかけた。

ちなみにここから僕らの家までは歩いて10分ほど。

「うーん、ちょっと早いけど、どっか食べに行く?」

時間的には家にこのまま帰って晩御飯を四人で作る手もあっただろう、しかし今日はプロポーズをする特別な日、そう思うと僕はおいしいものを食べに行きたくなかった。

「あつ、いいな、それ。ミキはどう?」

「えっ、でもどっかおいしい店、あつたっけ?」

「えっと、それじゃあ……、あの店とかどう? 月一で食べに行つてた?」

「あつ、どこだっけ?」

「ほら、家を過ぎて3分くらい行つたところにある」

「……ああ、あそこだね。ならいいよ、わたしも」

「サキは? どう?」

「いいんじゃない、私も賛成!」

「よし! なら決まりだね」

「うん」

全員が頷くと、四人はそれぞれ恋人同士手をつなぎ、朝から昼にかけて積もった雪が溶けかけた道路の上を家まで歩いて行つた。

54、二人だけの末路

54、二人だけの末路

四人は家までの道を歩き始める。ここはさほど広い道ではない、本当なら四人並んで手をつなぎ歩きたかったが、仕方なく兄とサキさんの後ろをついて歩くことになった。必然的に兄はサキさんと話している。

嬉しい、嬉しいことだけど、ほんのちょっとだけ悔しかった。今までは自分だけがそばにいることを許されていると思っていたから。でもそれを声に出して言うつもりはない、なぜなら当然サキさんも同じように思っているはずだから。そして四人はそれぞれ新しくもつとそばにいたい存在を見つけていたのだから。

わたしは彼のすぐ横を歩けることで最高の幸せを感じていた。ふと彼の顔をのぞき込むととても嬉しそうな笑顔を浮かべていて、喜んでいるのがわかった。

わたしも兄と同じように彼と話し始めてみる。

「ねえ、コウタくん」

「ん？」

「嬉しそうな顔してるね」

「うん。サキがすごく幸せそうな顔、してたからさ」

「そっか」

「実はさ、まだ話してなかったことがあるんだ」

「なに？」

「僕ら二人には……、親がいないんだ」

「えっ!？」

わたしは驚いた、同じだったから。わたしたち二人も2年前に交通事故で両親を亡くしていた。

「どうしたの? ミキ」

「同じだよ、わたしたちもいない、おかあさんとおとうさん……」
「……そうだったのか。ごめん、いやなこと思い出させちゃって」
「うんうん。でも、優しくしてあげたんだよね、コウタくんもサキさんを」

「うん。だから言ったんだ、サキと一緒に住もうって。最初はただ優しくしてただけだった、でもすぐに愛おしく想う気持ちが生まれてきて、気がついたら愛していた、サキを」

「それじゃあ、わたしを好きになったのは……」

「感じたんだ、サキに似てるなって、一目見たときから」

「一緒だよ、わたしも。初めて手をつないだとき、おにいちゃんに似てるって感じた」

「そうか。なら運命だったのかもな」

「うんめい？」

「うん。きつと神様が会わせてくれたんだよ、僕ら四人を。このまま二人だけだと危ない……、いや、生きていけないって感じたから」
「きつとそうだよ、きつと。だってわたし、今とっても幸せだから」

「僕もだよ、ミキ」

神様が四人を会わせてくれた。兄妹同士が二人一緒に暮らして、わたしたちをさらに不幸する、絶対に踏み込んではいけない領域に入り込まないように。

55、四人の宿した生命

55、四人の宿した生命

僕は彼女と並んで手をつなぎ、妹たち二人の前を歩く。とても嬉しかった、さつき妹が見せてくれた表情が本当に幸せそうな笑顔だったから。

「なあ、サキ」

僕は話しかけた、彼女にこの最高に幸せな事実を確認するために。

「なに？」

「よかつたな、こうやって僕ら四人が出会えて」

「うん」

彼女は首を振ってはっきりと頷いてくれた。でもここで僕には一つ話しておかないといけないことがあった。それはどうして妹を愛するようになったのか、そのきっかけになること。

「実はさ、まだ話してなかったことがあるんだ」

「なに？」

「僕ら二人には……、親がいないんだ」

「えっ!？」

僕がそう告白したとき、彼女はこっちを振り向き、目を大きく見開いて驚いた表情を浮かべた。

「どうしたの？ サキ」

「同じだ、私たちと同じ……」

「えっ! じゃあ、もしかして……」

「うん。いないんだ、私たちもおかさんとおとうさん」

「そうだったのか。ごめん、いやなこと思い出させちゃって」

「うんうん。今はもう大丈夫だよ、それにシンヤくんやおにいちゃんに優しくしてくれるから」

「そうか。ならよかつた」

「それに私たち4人が出会ったのは……運命だったのかもね」

「運命？ どういうこと？」

「だってほら、私たち、兄妹同士でも愛し合っていたから。きっと感じたんじゃないかな、神様が危ない……、いや、このままじゃ生きていけないってさ」

「なるほど、そういうことか。確かに僕は、今最高に幸せを感じてるからな」

「うん、私も」

彼女は僕の幸せの想いに同意して頷いてくれた。

四人は少し離れて二人ずつ歩いていたので、互いに話している内容は聞こえていない。しかし再びシンクロし合ったように、同じことを話していた。

確かに危なかっただろう、もしも僕ら兄妹同士が出会わずに一緒に暮ら続けていたら。絶対に越えてはいけない一線を越えて、神さえも許さないであろう禁断の行為に及んで、望まれもしない命が妹のお腹に宿ったかもしれない。

でも現実とは違った。偶然にも兄妹同士が出会って、魅かれ合って、恋人同士になった。そしておそらくだが今、妹二人のお腹には歓迎されるべき、新しい命が産声を上げている。それはとても喜ばしく、本当に幸せなことに違いなかった。

56、二人の部屋

56、二人の部屋

四人が歩き始めて10分近く、前を歩く兄とサキさんが家のアパートのところで立ち止まる。わたしたち二人も立ち止まり、兄に聞こえるように声をかけた。

「ねえ、おにいちゃん。どうしたの？」

すると兄はわたしたちの部屋のドアのほうを向いて話す。

「ミキ、ついでだし、荷物とか置いて行こうか？」

「……わたしはいいけど……、二人はどう？」

「それもそっか。サキは？」

「いいよ。それにどんな部屋なのか見てみたかったし」

「コウタくんはどう？」

「いいよ。僕もサキと同じこと思ってたから」

「よし！ じゃあ、こっちに来て」

そう言っただけで兄はサキさんの手を引き、みんなをわたしたちの部屋がある2階の廊下に案内する。

このアパートは2階建てになっていて部屋の間取りは全て同じ、それぞれ10号室ずつ並んでいる。わたしの部屋はほぼ真ん中の206号室、兄はその隣の205号室だ。

「僕の部屋でいいかな」

兄は205号室の前で立ち止まり、カギを差し込んでドアを開けた。

「ねえ、そっちが妹さんの部屋？」

サキさんが兄に手を引かれて中に入る直前、わたしの部屋の表札を指差して聞いてきた。これにはわたしが答える。

「そっだよ。こっちがわたしの部屋だよ。あとそれと……」

「なに？」

「わたしのことは名前でもいいよ」

「あつ、ごめん。目の前にいるのに変だよ。じゃあ、ミキちゃん
でいいかな?」

「うん」

「私のことはサキちゃんがいいよ」

「わかった。そうだ! わたしの部屋も見る?」

「うん、見る、見る」

「じゃあ、こつちも開けるね」

そう言っただけでもカバンからカギを出し、自分の部屋のドアを開
けた。

「ん? サキ。どうした? あつ、ミキ。そつちも開けるの?」

一度中に入ったはずの兄が再び廊下に出てきた。たぶん、サキさん
がすぐに中に入ろうとしないのが気になったのだろう。

「うん。ついでだし、両方とも見てもらおうよ」

「そうだな。でもほとんど中は同じだけだね」

「えっ!? そうなの?」

「へえー、じゃあ、さっそく中にお邪魔して……」

「ちよつと待って、コウタくん」

二人の部屋の前に来て、さっきまで話さなかった彼がいきなりわた
しの部屋のドアを開いて中に入った。どうやらずっとすきをつかが
っていたようだ。

「待ってよ、おにいちゃん! 失礼だよ」

「いいよ。せつかくだから二人だけで両方とも見てもらおう、ミキ」

兄は中に入ることを止めようとしたわたしにこう言った。確かにち
よつと恥ずかしいが見られてまずいものがあるわけでもないので、
兄に同意することにした。

「うん、わかった。じゃあ、二人で見えてきて」

「いいの?」

「うん、わたしたちはここで待ってるから」

「ありがとう」

そう言っただけでもサキさんは先に入った彼を追いかけて中に入っていった。

57、四人一緒に……

57、四人一緒に……

僕ら兄妹の部屋は椅子やテーブル、電化製品、カーペットやカーテンに至るまで色が一部違つ以外はおそろいで、その配置もほぼ同じだ。さらに普段着る服では、部屋着やパジャマが色違いのおそろいになっている。

これらはもちろん偶然そうなたわけではなく、一緒に買いに行つたり、どちらかがお店で見えていいなと思つたものを二人分買つたりすることによるものだった。

「二人とも、びっくりするだろうな」

「そうかな？ 二人もわたしたちと同じようにしてるんじゃない？」

「どうだろう？ してるかもしれないけど……、ここまでは一緒にしていないと思うよ」

「そっかー」

僕と妹は二人が見終わったときの反応を楽しみながら待っている。

3分ほど経つただろうか、妹の部屋のドアが開き外に出てきた。妹がさつそく中を見た感想を二人に質問する。

「どうだった？」

「よかつたよ。すごくきれいにしてあつたし。おにいちゃんは？」

「そうだな。サキもこれくらいきれいにしような」

「ひどいよ、おにいちゃん。私だって、ちゃんときれいにしてるよ」

「あれ？ そうだっけ？」

「もつっ」

「はははっ」

「ふふっ」

「冗談だよ、冗談。ごめん、ごめん。じゃあ、今度はこつちだ」

「うん」

そう言つて二人は今度は、隣の僕の部屋のドアを開けて中に入つていった。

ここで待つている間僕は家に関して、四人がそれぞれ結婚したあとどうするのか、気になつて妹に聞いてみた。

「そういえばさ、結婚したら、家どうしよつか？」

「えつと……、この家でそれぞれ住んだらいいんじゃない？」

「そういうわけにはいかないだろ、二人の荷物もあるだろうし」

「あつ、そつか。じゃあ、もっと広いところに引っ越さないとけないね」

「うん。問題はそのときだな。二部屋にするか、それとも一部屋にするか」

「えつ、別々に隣同士で住むんじゃないの？」

どうやら妹は結婚したら今までと同じように、隣同士別々に住むことになると思つていたようだ。

「いや、それも有りだけどさ、かなり広いところに移つて四人で一緒に住むのをありじゃないかなつて？」

「あつ、いいね、それ」

「だろ！ それに一緒に住んだ方がいろいろ助け合せて、お互いに楽しいだろうしさ」

「わたし、四人一緒にいい！」

「ミキもそつか。あとは二人の話も聞いてからだな」

「うん」

ちなみに今僕と妹が住んでいる部屋はそれぞれ1DK、もし四人一緒に住むことになれば、近いうちに子供が生まれることも考えて4LDKは最低でも必要だろう。それに当然四人一緒となると、家賃や光熱費や生活費などのお金に関すること、夫婦関係と兄妹関係が同時に存在することで必要になる適切、適当な距離感など、デメリツトの面も考えなければならぬ。

でも僕と妹にはもちろん、そしておそらく二人にも最高の信頼関係

がある。それを信じればこの問題も簡単に乗り越えられる気がした。

58、仲のいい兄妹

58、仲のいい兄妹

二人が僕の部屋に入って廊下に出てきたのは、中に入ってから5分後のことだった。さっそく並んでドアを背にして立っている二人に兄が感想を聞いてみる。

「どうだった？」

「すごいね。まさかここまで一緒だとは思わなかったよ。ねえ、おにいちゃん」

「ああ、カーペットやテーブル、カーテンの色が少し違ってただけどほとんど同じだったな」

「うん」

「二人は一緒にしてないの？」
今度はわたしが聞いてみる。

「うん、同じところもあるけど……、ここまで一緒じゃないよね」

「うん。せいぜい同じ電化製品がいくつかあって、カーテンやカーペットがおそろいなくらいだもんな」

「そうそう。でもどうやってこんなに一緒にしたの？」

「それは……まあ、一緒に買いに行ったりしてね」

「うん」

「それは私たちもそうしてるけど、ねえ？」

「ここまで同じにはならないよな」

「うん。趣味が違ったりするし」

「それは相談して決めるんだよ、なっ」

「うん。同じもの買うって決めてね」

「そっか。でもケンカになったりしない？」

「うんうん。それにわかってるから、お互いにどんなのが好きかってね」

「そうだな」

「すごい。じゃあ、私たちよりずっと仲がいいかも。ねえ？」

「ああ、かもじゃなくて完敗だよ」

「はははっ」

「ふふっ」

わたしと兄は二人の反応を見て少しだけ笑った。それは部屋を見た感想を、二人が息ピッタリに言っつて、それに全く気付いていないのがおもしろいと思ったからだ。

ここで兄が家に寄った本来の目的に戻っつていう。

「さてと……、部屋のことはそろそろいいよね？」

「うん」

「よし！　じゃあ、荷物を置いてご飯食べに行こうか」

「そうだな」

「うん」

「わかった」

「なら、サキは僕の部屋でいいかな？」

「うん」

「コウタくんはわたしの部屋でいい？」

「いいよ」

二人はわたしと兄の問いかけに頷くと、それぞれ分かれて部屋に入っつて行く。

それから2分もかからず、再び四人はドアの外の廊下にそろい、さつきまで歩いていいた道に出ると、レストランまで恋人同士並んで手をつなぎ歩いて行っつた。

59、フオローの連係

59、フオローの連係

前を歩く僕はアパートから3分、「おいしいオムライス」と書かれた看板の前で立ち止まった。隣にいる彼女が見上げて聞いてくる。

「ここ？」

「そう。オムライス屋さんだよ」

「美味しいのか？」

後ろの二人も立ち止まり、彼が聞いてきた。

「おいしいよ」

ここは妹が答える。しかしいつまでもここで話すのもなんなのでドアを開けて中に入る。

「とりあえず入るか」

四人が中に入ると“カラン、カラン”と鐘の音が鳴り、ウェイトレスの女性が駆け寄ってきて、空いている席に案内された。いつも二人で来るときは小さなテーブルに二人席に向かい合って座る。でも今日は恋人同士四人、席の前で立ち止まり座り方に迷ってしまう。

「どうしよつか？」

「わたし、おにいちゃんと並んで座りたい！」

真っ先に妹がそう発言した。

「ミキ、もしかして僕と並んで座るのがいやなのか？」

これは当然の反応、彼が不満そうな表情で言う。

「そういう意味じゃないよ。だっていつもは小さな席で並んで座れないから、おにいちゃんと」

「そんなに好きなのか？ 兄のことが」

「うん……」

「はあっ」

「落ち込まないでよ。コウタくんのことのほうが好きだから」
落ち込む彼を妹が慌ててフオローする。

「ミキ、それはフォローになってないぞ」

「あつ……」

僕はそう指摘した。一瞬険悪なムードになったが、次の彼女の一言に救われる。

「いいんじゃない？ ミキちゃんの言う通りで。私もおにいちゃんと一緒にいいな。それにそのほうがシンヤくと向かい合って話せるしね」

これこそまさに見事なフォローだった。本心ではもしかしたら彼女も僕と並んで座りたかったかもしれない、でもここは妹の意見を採用してあげて、しかもその利点も指摘した最高の答えだ。

「それもそうか。サキが言うならいいよ、ミキの通りで」

「コウタくん、ありがとう」

「悪いな、サキ。気を使わせて」

僕は小声で彼女だけで聞こえるように言った。

「うんうん。私もおにいちゃんと一緒によかったから、それにミキちゃんみたいにはつきりと言えないしね」

「そっか。ならよかった」

彼女もどうやら妹と同じ気持ちだったようだ。妹は素直だけどころとわがまま、でも四人一緒にだからこそ、彼女がしっかりとフォローしてくれた。

気付かないうちにウエイトレスの女性が温かいお茶を置いてくれたテーブル、僕はほっと安心して妹と並んで席に着いた。

60、ちよつとしたお祝い

60、ちよつとしたお祝い

毎月決まって食へに行く店がオムライス屋さん、少し意外なところもあるが、これにはちゃんとしたわけがあった。

まず一つは家ではあのふわふわ半熟卵のオムレツが再現できないこと。わたしも兄もマネしてなんとか似たようなものは作れるになったが、オムレツをチキンライスの上に乗せて開くときの半熟卵の広がりが少ないことが多い。しかもこのオムライスは普通のとは違って卵が4つ、その分ボリュームがあつて余計にふわふわだった。次にいろいろな種類のオムライスが食べられること。定番のデミグラスソースやケチャップ、トマトソースのかかったものから、チーズ、バター、ハンバーグ、エビフライなどのトッピングをつけられ、オムハヤシやオムカレー、オムチキンスパなど一風変わったものもある。おかげで何度も飽きずに楽しむことができた。最後は落ち着いたお店の雰囲気。ここはチェーン店ではなく、仲のいい夫婦とその娘さんがウエイトレスとして働いている小さなお店で、訪れる客のほとんどが常連さん。そのためいつ来てもうるさくなく、家で兄と一緒に食べているのと同じ気分を味わうことができた。

四人は席に着くと目の前に置かれている二つのメニューを仲良く兄妹同士で見る。

「おにいちゃんは何にするの?」

「そうだな、やっぱり定番のデミグラスソースオムライスがいいかな?」

「そっか。でもさ、今日は特別な日だし、ほらもつと……」

「豪華なやつとか」

「うん」

「ミキはどつするの？」

「わたしは……、まだ決めてないよ」

「うーん、それに正直まだそんなに腹が減ってないんだよね」

「あつ、私も」

その言葉にサキさんが反応する。

「だよな。まだ食べ終わってから4時間ちよつとしか経ってないもんな」

言われてみれば確かにその通りだ。四人は映画を見終わってからすぐ昼ご飯にしたとはいえ、かなりゆっくり食べていて結局レストランをあとにしたときにはそれぞれ2時を少し回っていた。

「わたしもそう言われるとそんなに減ってないかも……」

でも特別な日、お腹が空いていなくても何かちよつとしたお祝いをしたい気持ちはある。

「ならば、ここ、ワインとかないの？」

そう思っていると彼が気を利かせてこう言ってくれた。

「あつ、それいいね、おにいちゃん」

「だな。じゃあ、そうするか」

「うん」

こうして四人は注文で一緒にワインを頼み、このめでたい日にお祝いをすることにした。

61、きっかけ

61、きっかけ

注文を済ませた四人、僕はデミグラスソースオムライスのトッピングがチーズ、妹とサキはトマトソースオムライス、妹の彼はオムハヤシを、あとオススメされた赤ワイン食前に持ってきてもらうことにした。

この店は注文を受けてから作り始めるシステムで、四人分だと大体15分くらいはかかるとウエイトレスさんが言っていた。それまで四人は注文後すぐにグラスに注がれたワインを前に待つ。

「あつ、おいしい、これ」

最初にワインに口をつけたのは妹で、笑顔で感想を言った。つられて僕を含めた三人も一口飲んでみる。

「美味しいな、飲みやすくて」

「ホントだ、美味しいな、これ」

「うん、おいしくて飲みやすい」

どうやらワインは本当においしくて、四人の舌をすっかりつかんだようだ。

「でさ、おにいちゃん」

ここで妹がグラスを置いて聞いてくる。

「なに？」

「いつプロポーズするの？」

ついに来たこの質問、確かに今日プロポーズすることは事前に決まっただけで、お互いにそれぞれ予告していた。しかし何時するとは決めておらず、彼女も妹も暗黙の了解ですつと1日聞いてこなかったのだらう。でも人の心には我慢の限界というものがある。妹の何気ない質問は、実はきつとそういう気持ちから出たもので、僕はすぐにそれが分かった。今ちようどプロポーズしたほうがいいと、して

ほしいと思っているよ。

ただこのとき反応がさらに早かったのは、妹の彼のほうだった。

「じゃあ、今にしよっか」

なんとそう言っつて、上着の内ポケットから小さな白いケースを取り出したのだ。

結婚、これは僕が妹と一緒に生活するとき、一番問題になると思っていたことだった。もうすぐ2年前になる、僕らの両親が交通事故で亡くなったのは。実はこの事実を突き付けられたとき、親のそばにいたのは妹だった。知らせは仕事中に鳴った携帯電話で、妹が咽びながら大泣きで“おかあさんとおとうさんが死んじゃった……”と言った一言しかほとんど聞こえなかった。あまりに突然の悲しい出来事で僕も泣き叫びそうになったが、妹の悲しさは明らかにそれよりはるかに大きくて、僕にそうはさせなかった。そして僕は最後に電話で”早まったことだけは絶対にするなよ！　すぐにそっちに帰るから！！”とだけ言っつて、会社を早退して昼の新幹線で地元に戻って帰った。

62、兄の優しさ

62、兄の優しさ

わたしが両親の亡くなったことを聞かされたのは警察からの1本の電話だった。つい1時間ほど前に“買い物に行ってくるね”と言って二人で出て行ったばかりだったのに。始めは信じられなかった、交通事故で二人が亡くなったなんて。うそだ、何かの間違いだ、そう心に言い聞かせて二人の遺体が運ばれているという警察署に駆けつけ、霊安室に連れて行かれた。しかしそこあった顔に白い布が被せられた二つの遺体、身元確認のため取られて見えた顔は、事故の傷で無惨な姿にはなっていたが、おかあさんとおとうさんに違いなかった。瞬間悲しみと絶望のシヨックで涙があふれ出てきて、顔を伏せて大泣きした。10分ほど経って立ち会って来ていた警官の人に連れられ、部屋の外のいすに案内された。そこで警官にこう言われた、“君の兄には私から伝えたほうがいいかな”と。おそらく気を使ってくれたのだろう、とても落ち着いて電話できる様子に見えなかっただろうから。でもわたしは自分でかけると言った、きつと兄なら今のわたしをどうにか励ましてくれると思ったから。本当は兄も電話口でも大きなシヨックを受けたに違いない、それでも泣き声1つ漏らさず言ってくれた、“早まったことだけは絶対にするなよ！すぐにそっちに帰るから！！と。だからわたしは兄のことを信じて待った。

兄は電話が切れてから3時間後にはもう目の前にいた。家に帰って自分の部屋でベッドに顔を伏せて、泣き続けていたわたしの目の前に。“ミキ、遅くなってごめんな”と優しく声をかけてくれて、後ろからわたしをベッドから引きはがし、思いつ切り抱きしめてくれた。温かかった、本当に兄の身体は温かくて、自然と流れる涙は少なくななり、心も落ち着いてきて安らいだ。

その後一緒に外に晩御飯を食べに行き、夜はわたしのベッドで身体を近づけあって眠ってくれた。そして次の日の朝、兄は言ってくれた。

「そういえばミキの就職先って、僕の会社の近くだっけ？」

「そうだよ」

「じゃあ、卒業したら一緒に生活しようか」

「えっ！ いいの？」

「うん。ちょうど僕のいるアパート、隣の部屋が空いてるから」

「嬉しい。ありがとう、おにいちゃん」

「じゃあ、決まりだな。今日向こうに帰って不動産屋さんに行ってみるよ」

「もう帰っちゃうの？」

「ごめんな、仕事を休むわけにいかないから」

「そっか」

「大丈夫だよな、しばらく一人でも」

「うん」

わたしははつきりと頷けた、兄が絶望していた未来に明るい光を灯してくれたから。

63、新たな兄妹

63、新たな兄妹

妹と一緒に生活を4月から始めること、それは横で幸せそうな表情を浮かべて眠っているのを見て決意した。親の監視がもうない兄妹と一緒に生活することの危険性、もちろん十分に覚悟はしていたが、それでもなお僕は不安だった。しかし他の選択肢は残されていなかった、妹の涙を、悲しみの大きさを同じように感じていたから、ずっと我慢していた涙は妹が寝ていた横で頬をつたいだし、止められないと分かると洗面所でひたすらに泣いた、聞こえないように手を口に当てて声を押し殺して。一人ではとても耐えられなかった、すぐそばにいてほしかった。

ところが実際に生活を始めてみると、そんな心配は無用だった。予想以上に妹と一緒に生活は楽しくて、毎日が明るい日射しに溢れていた。一番心配していた二人の兄妹関係も、許されないものに発展することはなく、僕にはすぐに恋人ができた、同時に知らなかったけど、妹にも。そして偶然にも四人は兄妹同士で、境遇がよく似ていた。

今僕には確信があつた、妹と同じように彼女を幸せにできる、彼も僕と同じように妹を幸せにしてくれると。だから僕も上着の内ポケットから小さな白いケースを取り出した。二人は目を合わせて頷き、同時に開けて中の指輪を見せた。ちなみに僕の指輪は昨日昼休みにデパートの宝石コーナーで買ったもの。小さなダイヤモンドが付いたプラチナリングの指輪だった。

「待って！」

二人がプロポーズの言葉を告げようとしたとき、彼女がそれを止めた。

「ん？ どうした？」

「私、ありふれた言葉じゃ、いや！」

「どういう意味だ？ サキ、それ」

「あれ？ 分からないの？ 二人とも」

「……うん」

「ミキちゃんは分かるよね？」

「……あつ、わかった！ じゃあ、わたしもありふれた言葉じゃ、いや！」

どうやら妹も彼女の言っている意味が分かったようだ。おそらくそんな難しいことではない。一般にプロポーズでは“僕と結婚してください！”と云うだろう、二人が向き合って彼が。でも僕らは四人、しかも恋人同士で、兄妹同士だ。

「あつ、わかった！」

「あつ、そういうことか！」

二人はほぼ同時に彼女が言った意味に気が付いた。

「よかった。じゃあ、言ってみて」

僕と彼は再度目を合わせて頷き、愛する相手にこう告げた。

「僕の妹になってください！」

それが僕らの出した答えだった。

64、幸せの道

64、幸せの道

二人の兄が声をそろえて言ってくれた言葉、その瞬間わたしとサキさんの兄は替わった。今までわたしは兄に幸せにしてもらってきた、だからこれから同じように彼が幸せにしてくれる。しかも彼は兄とは違う、許されている、心の底から愛することを、身体を通して愛を伝え合い、新たな生命をお腹の中に宿すことを。答えを告げる前、左手の平で少しお腹に触れてみる。するといつもより温かく、ゆっくりとした鼓動が手に響いてきたような気がした。

「ありがとう。わたし、コウタくんの妹になってあげる」

「ありがとう。私を幸せにしてね」

だからわたしたちはプロポーズを受けた。指輪をすつと手に取り、左手の薬指にはめた。わたしとサキさんは目を合わせて笑顔を浮かべた。

「おめでとう！」

そのとき突然わたしたちの隣のテーブルからそんな声が聞こえてきた。そこにはちよつと年上の若い夫婦だろうか、落ち着いた雰囲気はなんとなくそんな感じだった。二人は手を叩いて温かい拍手もしてくれた。四人は急に恥ずかしくなつて照れ笑いを浮かべる。

「おめでとう！」

「幸せになつてね！」

.....
でも祝福はそれだけではなかった。いつの間にか他の客みんながこちらに視線を向けてくれていて、幸せを願い、祝う言葉と拍手を届けてくれた。

四人は最高の祝福を受けて、これから今よりもっと、もっと幸せになる。

結婚してつながり合って、家族になって、ずっと、ずっと永遠に続く幸せの道を歩んでいく。

わたしは今を、未来を信じられた、一度は両親を亡くして暗く閉ざされた世界だった。絶望してこの世から消えてしまいたいとも思っただ。しかし今は違う、隣には本当に大好きでわたしを救ってくれて、心から幸せを願っている兄がいる。そして目の前に最高にわたしを愛してくれる彼、新しい兄が優しくして心強い目で見つめてくれていた。

65、これからの生活

65、これからの生活

僕は本当に嬉しかった、この2年間ずっと妹の幸せを一番に願っていたから。彼がしたプロポーズを受けたとき、妹はこれまでで最高の本物の笑顔を見せてくれた。

しばらくして祝福の拍手が鳴り止んだころ、四人が注文したオムライスがウエイトレスによって運ばれてきた。

「結婚、おめでとございます！」

「ありがとうございます！」

4つのお皿がテーブルに並べられると、一礼をしてそう言ってくれた。離れた後、それぞれスプーンを手に見た目の感想を言う。

「おいしそうだね、おにいちゃん」

「だな、ミキ」

「これは美味そうだな」

「おいしそう」

四人の前に並んだおいしそうなおムライス、“いただきます”をしてさっそく口に運ぶ。

「美味い！」

「これ卵ふわふわだよ、おいしい！」

「おいしいね」

「やっぱ美味しいな、ここは」

四人は思い思いの感想を口にし、オムライスを食べて行った。

途中オムライスの大きさがみんな半分以下になったところで、僕はこれからの生活について聞いてみた。

「そうだ、一つ聞いておきたいことがあるんだけど」

「なに？ おにいちゃん？」

「ほら、さっき言ってたことだよ、これからどうやって四人で生活

するかつて」

「それは四人一緒がいいんじゃないか、ミキ」

「私もそう思うよ」

「えっ!？」

「どうしたんだ？ そんなに驚いて」

驚いた、まさか彼ら兄妹も僕らと同じことを考えていたとは。こっちは驚いている妹の代わりに僕が答える。

「いや、僕らも同じこと思ってたから。な、ミキ」

「うん」

「そうだったんだ。じゃあ、決まりだね、おにいちゃん」

「そうだな」

「やったー!」

妹が声を上げて喜ぶ、とても嬉しかったのだろう、これで結婚後も僕と一緒に生活できることになったから。さらに声には出さなかったが、他の三人にとっても嬉しいことだった。この2年間同じように二人一緒に生活してきた、お互いの幸せを願ってきたのだから。そしてそれはこれから新しい兄、つまり夫と生活する妹の姿を見届けたいという純粋な僕の願いでもあった。

このあと四人はオムライスを食べながら、一緒にするこれからの生活のことを話し合った。

66、希望の扉

66、希望の扉

結婚しても兄と一緒に生活できる、そう決まったことをわたしは素直に喜んだ。

ただ普通に考えれば2組の夫婦と一緒に生活するというのは、あまり現実的ではないだろう。理由をいくつか挙げると、まずは夫婦それぞれのプライベートな問題、昼間の少し恥ずかしくなるようなやり取りはいいとしても、夜は一緒の家で寝るわけにいかない。次にお金の問題、初めのうちは上手く分けられたとしても、どちらかに子供ができれば家族の人数が同じではなくなり、必ずもめることが出てくる。さらには夫婦関係の問題、普段は大丈夫だろう、お互いの存在が監視になっていくから。しかし例えばどちらかが出張に行つて、夫婦ではない男女が残った場合、そうなると不倫の心配をするのはもちろん、当然過ちを犯さないと絶対には言い切れない。この他にも一緒に生活が困難な理由は、おそらくまだまだたくさんある。

それでもわたしはこの四人なら絶対に大丈夫、そう思える確信があった。その一番の理由は信頼関係だ、全く別々の2組の夫婦が一緒に生活するのは違う、わたしは兄とおよそ2年間、いや20年以上は一緒に生活し、強い信頼関係を築いてきた。わたしには今後どんな困難にぶつかっても、必ず乗り越えていける自信があった。それは他の三人も同じ、四人は恋人関係だけでなく、兄妹関係でも固く手をつないできたことによるものだった。

四人でオムライスを食べながら話し合いをした結果、これからの生活でいくつかが決まった。まず今日はわたしたちの部屋に泊まってもらって、明日のうちに一緒に婚姻届に記入すること。実はまだ兄に話していないのだが、金曜日の昼休みに市役所に行って婚

姻届をもらっている。次に早いうちに不動産屋さんに行つて、来月から四人一緒に生活する家を決めること。ちなみに住む部屋の広さは4LDK以上で、場所はわたしたちが今住むアパートの最寄りの駅の近くに決まった。また家の中では特に生活空間を区切らないこと、これはわたしの提案で願いでもあった。彼だけでなく兄の顔もずっと見ていたい、それはわたしだけでなく他の三人にとつても同じ願いだった。さらに子供ができたら分け隔てなく四人で育てていくこと。二人の夫婦の間でできた子供、でも同時に四人の間でできた子供でもある、そのことは四人にとつて共通認識だった。

これから始まる2組の夫婦と、2組の兄妹の共同生活。いろいろな厳しい困難がたくさん待ち受けているのは間違いない。けれども苦労が四人分なら、必ず喜びも四人分、いや子供がたくさんできればそれはきつと何十倍、何百倍にも膨らんで返ってくる。

そしてわたしたち四人の願い、希望の光が待っている扉は今日の前
に開かれた。

67、幸福の証（最終話）

67、幸福の証（最終話）

店を出たのは夜の8時過ぎ、扉を開けた先、辺りはすっかり暗くなつていて、道路の所々が街灯の淡く白い灯りで照らされているだけだった。この時間になると車はもうほとんど通ることはない、四人は兄妹同士並んで手をつなぎ、家までの道を歩いていく。

みんなが幸せな笑顔を浮かべていて、握った手、握られた手は冬の夜の風に曝されているにもかかわらず、熱を帯びていても温かった。

「おにいちゃん、わたし今、すごく幸せだよ」

歩き始めて最初に口を開いたのは僕の妹、想いは本物の言葉で今に對する率直な実感だった。それは僕も、彼女も、妹の彼も全く同じ。

「僕も幸せだよ」

「私も幸せ」

「僕だつて幸せさ」

だからみんな口にせずにはいられなかった、その率直に幸せな想いを。

ふと見上げた空、そこには満天の星空があり、ちよつと歩いていく先に一際明るく月が輝いている。僕はこんな話を聞いたことがある、月は明日が希望に溢れている人ほど輝いて見えると。今日は最高に明るく輝く目映いばかりの白い月だった、気が付いたときにはみんな同じ視線で目を奪われていた。

「月がきれいだな」

「うん」

「ねえ、おにいちゃん」

ここで今度は彼女が兄に話しかける。

「なに？」

「月がすごく明るく見えるね」

「ああ、それはきつと僕らがすごく幸せだからだよ」

「今までありがとね、おにいちゃん」

「こちらこそ。これからもよろしくな」

「うん」

そのやり取りを見つめていた妹、頷いて僕に視線を送る。

「おにいちゃん、今までありがとう」

「こちらこそ。これからもよろしくな」

「うん」

元々は同じ悲しみを乗り越えるために一緒に暮らしていた兄妹、今度は恋人同士でつながり、さらに強く、強く四人がつながっていく。僕らは手をつなぐだけでは耐えられず、丸くなって身体を寄せ合い四人抱きしめ合った。

感じ合ったそれぞれの身体の温度、人肌の純粹な温かさ、一人一人の熱は少ないけれど、四人が集まるとそれは呼応し合って、何十倍何百倍にも温かく感じられた。

やがて肩に乗せていた顔を上げて、恋人同士、兄妹同士、唇をゆつくりと近づけ触れさせた。僕ら四人はただ2組の夫婦が一緒に生活するわけではない、お互いがお互いにとって夫であり、妻であり、兄であり、妹なのだ。四人がいつまでも離れられず、長い間交わしたキス、それはこれからの未来に誓う幸福の証だった。

68、〜エピソード〜（前書き）

みなさんレインタンです。ここまで読んでいただきありがとうございます。ます。

本編は前回で終わりですが、エピソードとちょっと長めのあとがきを2回に分けて書く予定です。

どうかよろしければ最後までお付き合いください。よろしく願います。

68、くエピローグ

68、くエピローグ

日曜日の午前中僕の部屋と一緒に過ごした四人、同時に妹がもらっておいでくれた2枚の婚姻届に、恋人同士それぞれの名前を記入した。ちなみに苗字は二人の妹の希望もあって、兄のほうにすることになった。つまりこれから妹は佐藤美希に、僕の妻は中藤沙希になる。

午後は明日から四人とも仕事で忙しいとあって、近くの不動産屋さんへ家を探しに行った。4LDKほどの広さで家賃は15〜20万前後、いろいろ紹介してもらった結果、駅から徒歩7分のところにある築5年のマンションの4階の部屋に決まった。間取りは4LDKで広さは95?、中はキッチンにリビング・ダイニング、和室が2つと洋室が2つになっている。そして新しい部屋には来週の3月から住むことになった。

あれから6年後、わたしは四人の新しい家族の子どもたちに囲まれて八人で暮らしている。四人の子どものうち、女の子二人は2歳と4歳で兄とサキさんに間に生まれ、わたしと彼との間には同じく2歳と4歳の男の子が生まれた。八人で住む4LDKの部屋、少し狭く感じることもあったが、仲のよさもあってかほとんど気にならなかった。ちなみにわたしとサキさんは子どもができたと分かってから仕事を辞め、今は二人の兄が2組の一家を支えてくれている。

今日は週末の金曜日、二人で晩御飯を作っていると玄関から愛しの兄の声が聞こえてきた。

「ただいまー」

「帰ったぞー」

するとリビングで仲良く遊んでいた四人の子どもが駆け出し、先におとうさんを出迎える。

「おかえりなさい」

「パパ」

「おかえりなちゃん」

「パパ、だっこ」

「はは、いきなりだっこか、よし」

わたしたちもコンロの火を止め、子どもたちを追いかけて玄関に向かった。

「おかえりなさい、あなた」

「おとうさん、おかえりなさい」

さすがに子どもたちの前で”おにいちゃん”と自分の夫を呼んだりしない。でも夜に抱き合うときは”おにいちゃん”と呼ぶようにしている。

わたしはこの6年間本当に幸せだった、ずっと大好きな兄が二人もいるような生活だったから。それはこれからも永遠に続いていくだろう、そして二人のお腹の中にはさらなる幸せの証、新しい生命が二つ宿っていた。

69、あとがき（最終回）

69、あとがき（最終回）

みなさんこんにちは、こんばんは、おはようございます。レンタルです。今日は長編恋愛小説「兄妹」の完結に際して、少し長めのあとがきを書きます。もしよろしければ最後までお付き合いください。

それではまず、エピローグを含めて最終話まで読んでくれたみなさん、本当にありがとうございました。非常に未熟者の僕ですが、これだけたくさんの方々に読んでいただけて感謝の気持ちで一杯です。

この小説は「夕日」の“それぞれの休日”を基に、2つの視点を交互に行き来するものを考えました。他にもこのような恋愛小説はあるみたいですが、彼氏彼女視点を交互に行き来するものが多く、兄妹を行き来するものは珍しいのではないかと思います。

さらに兄妹二人は近親相姦ではなく、お互いに恋人がいる設定にしました。これは僕自身が近親相姦系の設定が好きではないのと、今回の設定の方がハッピーエンドに持っていきやすいのが関係しています。

またR15指定にもわずか7話ですが、初めて挑戦しました。ただ内容的にはかなり過激で際どいものしたので、みなさんからの御意見によっては、その部分だけノクターンノベルズに移してもいいかなと思っています。ただこの部分のお陰でアクセス数を稼げた感が否めないのは、嬉しいような、悔しいような複雑な気分です。ちなみもう消しましたが前に書いたR18指定との違いは露骨さでしょうか、一応そのものを示す言葉を使わないようにしてみました。

兄妹視点では、ただ兄と妹から分けて書くのではなく、それぞれの文章に特徴を持たせてみました。兄のほうは大人っぽく思いやりが感じられるように、妹は子供っぽく素直で少しわがままに感じられるようにしています。さらに一つの文章を途中で切って、兄から妹に、妹から兄に移っていく部分もいくつか作っています。

個人的に一番気に入っている話は「28、離したくない気持ち」でしょうか。描くに苦労した兄妹の心理を最も上手く表現できたと思っています。他にも前半では「11、柔らかかさの訳」、後半では「54、二人だけの末路」、「55、四人の宿した生命」もかなり気に入っています。基本的に兄妹の心理を上手くシククロさせることに重点を置いた話には思われがあります。

あまり長くなると、退屈してくるのでこらで終わりにしておきます。

それでは改めて、ここまで本当にありがとうございました。そしてどうかこれからもレインタンを、みなさん、どうかよろしく願います。

記録集（最終回投稿時現在）

合計PVアクセス数 42715

合計ユニークアクセス数 6069

1日の最高PVアクセス数 809（11・03・30）

1日の最高ユニークアクセス数 94（10・12・15）

月間最高PVアクセス数 10082（11・01）

月間最高ユニークアクセス数 1382（10・12）

以上です。

69、あとがき（最終回）（後書き）

あとがきまで読んでくださったみなさん、本当にありがとうございました。
ました。

今週の休日にブログでここには書けなかったことと
次回作の予定を書きたいと思っています。

もしよろしければ、そちらのほうもよろしくお願いします。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6411o/>

兄妹

2011年7月25日14時56分発行